

THE JOURNAL OF
JAPANESE HISTORY OF PHARMACY

薬史学雑誌

Vol. 13, No. 2

1978

— 目 次 —

史 料

本草硝石より黒色火薬への発展 岡田 登 45

資 料

漢方文献の検索法 (第1報) 久保 道德, 谿 忠人, 小曾戸 洋 50
森山 健三, 木村 善行, 有地 滋

漢方文献の検索法 (第2報) 同 上 58

神農本草経の収載薬品の品別について 浜田 善利 67

雑 録

前号の訂正 77

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

薬史学誌

J. His. Pharm.

日本薬史学会

THE JOURNAL OF JAPANESE HISTORY
OF PHARMACY, Vol. 13, No. 2 (1978)

CONTENTS

Historical Records

- Noboru OKADA: Origin of Gunpowder from the Chinese Herb Medicine,
Saltpeter.45

Document Research

- Michinori KUBO, Tadao TANI, Hiroshi KOSOTO, Kenzo MORIYAMA,
Yoshiyuki KIMURA, Shigeru ARICHI: References of Chinese Traditional
Medicine. (Part 1)50
Michinori KUBO et al: References of Chinese Traditional Medicine. (Part 2)58
Toshiyuki HAMADA: On Assortment of the Drugs contained in "Shen-nong-
ben-cao-jing".67

Miscellaneous

- Errata77

入会申込み方法

下記あてに葉書または電話で入会申込用紙を請求し、それに記入し、年会費をそえて、
再び下記あてに郵送して下さい。

〒101 東京都 千代田区 神田駿河台 1-8

日本大学 理工学部 薬学科 生薬学教室

滝戸道夫

電話：03-293-3201 (代)

本草硝石より黒色火薬への発展

岡 田 登

Origin of Gunpowder from the Chinese Herb Medicine, Saltpeter.

Noboru OKADA

緒 言

黒色火薬と紙と印刷術と羅針盤は中国古代の四大発明¹⁾といわれる。この黒色火薬は中国において、本草、神仙術（鍊丹術）の発展ののち、宋代において、発明がほぼ完成されたと推定¹²⁾される。中国において発明された黒色火薬は13世紀中頃に至り、アラビアを経、あるいは蒙古軍のヨーロッパ侵入により、ヨーロッパへ伝わったものと考えられる。日本においては文永11年（1274）蒙古軍は博多上陸のおり、鉄炮を用いたことが知られており、ついで種子島への鉄炮伝来（1543）のおり銃砲とともに黒色火薬が知られたのがその始まりである。

この黒色火薬は中国において、本草あるいは神仙術などから発展して完成されたものであり、ここにその発展過程における一端を述べる。

黒色火薬と無煙火薬

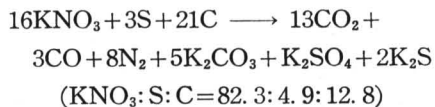
黒色火薬とは硝石約75%，木炭約15%，硫黄約10%からなり、色が黒く、爆発あるいは燃焼したとき黒煙を生じ、戦場においては砲手を真っ黒にし、ひいては大砲や小銃を汚し、戦場の空を暗く、また見通しの悪いものにするといわれる。

この黒色火薬に対し、無煙火薬は煙が少なく、フランスの Claud Louis Berthollet (1748~1822)による塩素酸カリ(1786)、ドイツの Christian Friedrich Schönbein(1799~1868)によるコロジオン(ニトロセルロース、

硝化綿ともいわれる、1846) イタリアの Ascanio Sobrero (1812~1888) によるニトログリセリン(1846)、スエーデンの Alfred Nobel (1833~1896) によるダイナマイト (1867) の発明などは比較的新しく、かつその歴史もよく知られている。

黒色火薬の爆発

黒色火薬の爆発燃焼³⁾については次の式が知られている。



この燃焼時の体積増加は、黒色火薬の見掛け比重を1として（通常見掛け比重は0.9~1.1、真比重1.58~1.84）0°C、1気圧では271.3 倍の体積増加がみられ、著るしい体積増加は精度の悪い初期の銃砲などに極めて理想的な火薬であったことが知られる。

硝石の発見

硝石の発端は明らかにされていない。しかし中国奥地、インド、チリーなどでは硝石は天然に産出する。インド、中国における硝石は紀元前より知られていたと推定される。この硝石の発見は、これら硝石の上で焚き火をするとか、あるいは山火事がおきたときなどに燃焼あるいは爆発したことなどにより発見されたものではなからうか？ あるいは中国奥地では他の不利から食塩がえられず、従ってこの爆発のさいの硝石、あるいは井を掘り、

その水分を濃縮し、結晶させこれを食塩の代用に用い、さらには医薬としての硝石が用いられるようになったのではなからうか？ たとえばこれら硝石の他に^{たうしや}硝砂（塩化アンモニウム）は飲用したとき有毒であることが知られているが、本草綱目⁴⁾によれば、中国北方の異民族は塩化アンモニウムさえ食塩の代りに用いたことが知られている。

硝石の生成

- 1) 現今、自動車の排気ガス中に亜硝酸などの NO_x が生成することが知られており、これは空中の窒素が、高温、高圧のもとで NO_x を生成するものである。
- 2) また雷の放電時に NO_x が生成することが知られているが、この量は極めて少なく、しかも降雨により流失してしまい、
- 3) かかる放電を用いた硝石の製造は1908年頃、ノルウエーで試みられたが、使用電力大で非効率のため行なわれず、
- 4) ついで微生物による硝石⁵⁾（硝酸塩）の生成が知られており、これには、

i) 空中窒素をアンモニアに固定する菌が知られており、好気性菌においては *Azotobacter beijerinckii* 窒素菌科の *Azotobacter beijerinckii*、嫌気性菌においては *Bacillaceae* 枯草菌科の *Clostridium pasteurianum* などの菌は空中窒素をアンモニアに固定することが知られている。

ii) ついで上記の菌により生成したアンモニア、あるいは草、動物糞尿などの有機物から生成したアンモニアより硝酸塩を生成する菌が知られており、*nitrobacteriaceae* 硝酸菌科の *nitrosomonas europaea* などの菌はアンモニアより硝酸塩を生成する。ここで生成する硝酸塩は、土中のアルカリ成分により、ナトリウム塩、カリウム塩、カルシウム塩、マグネシウム塩、アルミニウム塩などの他、生成過程ではアンモニウム塩も生ずるものと思われる。

前述の中国奥地、インド、チリーなどで天然に硝酸塩が生成するのは、これら2種の菌が共生し、空中窒素より硝酸塩を生成するも

のと推定され、わが国およびヨーロッパではこのようにして硝酸塩が生成しても、硝酸塩は水に可溶性であり、降雨により流れ去ってしまうので、古い寺社、あるいは地下室などの床下の土を水で抽出し、ついで濃縮結晶化により硝酸塩をつくっていたことが知られており、この生成過程もこれら2種の菌の共生によるものと思われる。

古典的な極めて大量の硝石を積極的に製造する方法は植物、動物糞尿などの有機物を土中に放置しておく、その臭い臭いがなくなる頃に硝酸塩を生成する。これは先づ有機物からアンモニアが生成し、ついで前述の ii) の硝化バクテリアの作用によるものと推定される。この方法もわが国のように多雨のところでは、小屋掛けして硝酸塩を製造していたことが知られている。

この製法の最初はいつ行なわれたか明らかではないが、中国奥地、蒙古、アラビアなどでは雨が少なく、動物糞を燃料にすることにより、これらの乾燥地帯で長期間経過した糞中に生成した硝酸塩を糞とともに燃料に用いたとき、極めて発火性の強いことを見出し、ついで中国では、本草綱目⁴⁾によれば、開宝本草(973)において、所在の山沢で冬季地上に生ずる霜をはきとり、水でとかし、これを濃縮し、硝石をつくり、これを地霜と称したことが知られているが、これは経験的に蒙古などから前述の知識を用い、地霜としての硝石製造を行なったのではなからうか？

ついでインドの硝石はアレキサンダー大王のインド遠征時(B.C. 326)にインド、パンジャブ州(現・パキスタン)の土民のオキシドラカエ人(*oxydrakae*, or *oxydracae*)は、大きな虫からとった油と、天然に産する硝石を用い、何らかの火薬様物質をつくり、アレキサンダー大王の軍を撃退したと伝えられるが、以後15世紀まで知られておらず、ついで17世紀に至りイギリスの東インド会社により採取され、ヨーロッパへ持ち込まれたことが知られており、ついでチリー西海岸一帯に産出する硝石は19世紀半ばに発見され、各国へ輸出されたのが知られており、わが国でも明

治維新後チリ硝石を輸入していたことが知られている。

5) ついで Wilhelm Ostwald (1853~1932) によるアンモニアよりの硝酸の合成が行なわれ(1901), またわが国でもアンモニアよりの硝酸合成が1928年より日本窒素肥料, 延岡工場で工業化されているのが知られており, 前述の植物, 動物糞尿などからの硝石製造は全くかえりみられなくなってしまったのが知られている。

本草における硝石

中国においては, 硝石は水に消け, また加熱することにより消失してしまい, また諸石(他の鉱物など)を消かし, しかも石のように硬いので消石と呼ばれた。この消の字が用いられているのは, 16~17世紀頃までであり, 16~17世紀頃より硝の字が用いられているようである。

燃焼についての記載は, 神農本草経⁶⁾, 名医別録⁷⁾では記載はみられないが, 神農本草経集注⁸⁾以後の本草書において, 焼けば紫青煙がおこることが記され, 本草衍義⁹⁾ではよく煙火を発することが記され, 本草綱目には火に遭えば^{たちま}勿ち焰を起すことが記され, また火で焼けば紫青の煙が起つ, とあり, また兵家は烽, 燧の火薬を作るに用いることが記されている。

硝石の産地については, 神農本草経では, 山谷に生ず, とし名医別録以後の本草書では益州山谷, 武都, 隴西, 西羌とし, 名称については, 名医別録以後の本草書においては, 消石一名芒消とし, 本草綱目においては, 芒消, 苦消, 焰消, 火消, 地霜, 北帝玄珠, 生消といった名称もみられる。

鍊金術と神仙術

中国においてもヨーロッパ同様鍊金術が行なわれ, 水銀を煉って黄金をつくる黄白之術, また病を医し, あるいは不老長生を求め鍊丹術, さらに仙人になることを夢みて神仙術などが行なわれた。この神仙術は神遷術とも書かれ, 不老長生を求め, さらに仙人とな

り, 神となり昇天することを希ったと伝えられる。これら仙人あるいは神仙家は多くは人里離れた深山幽谷において, ときには庵, あるいは洞窟に住み, 仙人になる修業を行ない, ある仙人はときには五穀を断ってきびしい修業をし, ついで神に遷り昇天することを希い, またある仙人は洞窟において神仙薬なるものをつくり, それを服用することにより若返り, 不老長生をとげるといわれる。しかしこれら仙人はその手段方法が全く秘密主義で, 仙人から弟子へとその秘法が伝えられ, 時には現代のわれわれからみるとかなりのまやかさも行なわれていたと推定される。

当時の古代人の発想は現代の化学知識をもってすると極めて非科学的で, たとえば金(黄金)は火中に投じて, 土中に千年埋めておいても変化しないことより, 人の生命に比べ永久不変と考え, 秦の始皇帝(B. C. 246~B. C. 210)は金の食器を用い食事をし, 不老長生を希って徐市らをして海上に浮んだ仙境へ仙薬を求めさせたといわれる。徐福, 徐市, 徐明, 徐林らは蓬来の国, 日本へ渡来し, そのまま住みついてしまった¹⁰⁾ことが知られている。

また長生薬として多くの丹薬が用いられたが, 水銀化合物を含むと思われる丹薬さへ好んで用いられ, たとえば唐代においては多くの皇帝が愛用したといわれ, 太宗, 高宗, 玄宗などは聡明であったが, 憲宗, 穆宗, 敬宗, 武宗, 宣宗などはこれがため早死したといわれる。

鍊丹術の黒色火薬への発端

これら黄白之術, 鍊丹術, 神仙術などから黒色火薬に関係ある硝石を拾ってみると, 周易参同契¹¹⁾(B. C. 220)には硫黄の文字がみられ, 淮南子¹²⁾(B. C. 122)には夏至流黄澤とあり, 山海経¹³⁾(B. C. 6)には雄黄(雞冠石, 二硫化砷素), 青硫黄(砷素の混合した黄土)が記され, 抱朴子¹⁴⁾(303~317)には丹薬の原料になる8種の鉱物(八石)すなわち朱砂, 雄黄, 空青(中空状の孔雀石), 硫黄, 雲母, 戎塩, 消石, 雌黄(三硫化砷素)を調合する

ことが記され、三種の玉英(石英の五種)、八石(前述)で丹砂をつくることが記され、ついで列仙伝¹⁵⁾(B. C. 6)、神仙伝¹⁶⁾(303~317)大平御覽¹⁷⁾(982)、雲笈七籤¹⁸⁾(960~1279)には赤斧の物語が記され、赤斧は巴式(現青海省西寧)人で、碧雞祠(金馬碧雞を祀ったところと伝えられる)主簿(書記官)をなす。能く水瀕(水銀)をつくり、丹を鍊り、硝石とこれを服すること三十年、童子の如く返り(若返り)、毛髪生えて皆赤し(以下略)、と記され、また消石については加熱すれば消失してしまうので、これを加工したものを服用すれば、身が軽くなって空中を飛行できる仙人となれる、あるいは神仙薬が出来ると考えていたのではなかろうか？

神農本草経以後の本草書には、これを煉り、膏の如くして、久しく服すれば身を軽くす。とあり、名医別録以後の本草書には、鍊りてこれを服餌すれば、身を軽くし、神仙なる。といった記載がみられ、ついで宋代に書かれた雲笈七籤には数多くの硝石を用いた神仙薬についての記載がみられる。いづれも硝石や雲母などを用い、これらを加工したものを服用することにより、皮膚のつやがよくなり、童子の如く若返り、長生あるいは軽身などの薬効が記されている。これら硝石の作用が竜、鳳凰、白鶴に乗る仙人や芥川龍之助の杜子春や孫悟空の空を飛ぶ物語の発想をつくったのではなかろうか？

また大平広記¹⁹⁾(978)の杜子春にはかかる神仙術を行なった仙人の物語を記しているのがみられる。

黒色火薬の発明

硝石同様、硫黄も石のように硬く、加熱により消失してしまうので、始めは別々に、ついでこの2者をまぜ合わせ、さらには他の薬品、薬草を加えて加工しているのがみられる。

真元妙道要略²⁰⁾には、硫黄、雄黄を以て硝石並びに蜜に合せこれを焼けば焰起り、手面を焼き及びて屋舎燼するものあり、とある。

孫真人丹経内²¹⁾ 伏硫黄法では硫黄一両、硝石一両、硃砂(塩化アンモニウム)半両を粉

末にし、るつぼの中へ入れると液体となり、槽中に傾けると伏になる。(硫黄の性質を失わせるの意か？あるいは神仙薬が出来るとの意か？)とあり、伏火硫黄法²¹⁾では、硫黄と硝石を鍋あるいは缶の中へ入れ、この容器を土の中へ入れ、黒焼きにした皂角子(サイカチの実)を1つずつ入れていくと、焰が出るので、(中略)伏火なるなり、とあり、ついで伏火礬法²²⁾では硫黄二両、硝石二両、馬兜鈴(ウマノスズクサ)三錢半(200:200:35)を粉末にし、よくかきまぜ、缶の中に入れ、この缶を地中におき、火を入れると煙が起るので、これを冷やすと、といったことが記されている。

このように硝石と硫黄ついで薬草などを用い、加工することにより神仙薬がえられると考えたのではなかろうか？現在われわれが考えると無意味のように思われることが行なわれて来たが、徐ろにはあるがこれらの方法は黒色火薬へと発展したものと思われる。因みに前述の伏火硫黄法では各成分が未だ純粹でなく、またその配合比率も黒色火薬の比率と異なり、また各成分を粉碎混合してないために爆発はおこらなかったとみられるが、これら知識は隋代、唐代にかけ黒色火薬へと発展し、ついで宋代においては火薬を用いた火薬兵器、あるいは爆伏、烟火へと発展したものと思われる。

火薬兵器の台頭²⁴⁾

火薬以前の火器にはしばしば艾^{もぐさ}が用いられ、また火箭なども用いられたが、この火箭は小瓢に油を盛り、矢端に冠す、とあり、これら火器は8世紀から17世紀までの兵書にいたるまで記載されている。

ついで開宝二年(969)(宋史、物理小識)あるいは開宝三年(970)(大学衍義補、群書考索)に兵部令史馬繼昇ら火箭法を進め、(大祖960~976)試験を命じ、衣物束帛を賜る、とあり、ついで宋史、統資治通鑑長編には咸平三年(1,000)神衛水軍隊長、唐福、製するところの火箭、火毬、火蒺藜(火蒺藜、統資治通鑑長編)を獻ず。また群書考索、格致鏡原

には同年、神衛水軍隊長、新製の火箭、火毬、火鎗を献ず、とあり、これら火箭、火毬などが宋代の兵書、武経総要²³⁾(1,044)に始めて記され、また明らかに火薬を用いたことが記されるとともに、火薬について記されており、たとえば武経総要記載の火箭には、火薬を箭首に施し、弓弩を通し、これを用う、とあり、また同書記載の蒺藜火毬については、三枝六首の鉄刃をもって、火薬をもって、これを团し、とあり、以後の兵書には火薬兵器の記載がみられる。

烟火の起源²⁴⁾

一方中国では古くから烽燧、庭燎が行なわれ、この庭燎すなわち庭において焚き火をし、この中へ真竹とか生竹を燃やすと大きな爆発音を生ずるので、これが鬼や山臊人(山中に住む人)を退治するものとし、正月などに爆竹を行なったことが知られており、ついで新しく発明した黒色火薬を用い、この竹を燃やす爆竹に代り、宋代には火薬を用いた爆仗なるものがつくられ、ついで烟火(花火)がつくられたことが知られている。

東京夢華録(1147)には駕、宝津楼に登り、諸軍百戯を呈す、の中に、忽ち一声、霹靂の如きをつくる、これを爆仗という、とあり、ついで烟火大におこる、とあり(以下略)また宋代の歳時記、風物誌などには爆竹、爆仗、烟火などの記載がみられ、その製法については断片的に黒色火薬の成分などが記されている。

結 語

黒色火薬は本草ついで神仙術に用いられた硝石を用い、さらに硫黄、薬草などを用い、この中で黒焼きにしたサイカチの実を硝石と硫黄の中へ加えることにより、その構成成分に到達した。ついでこれらの方法は、隋代、唐代、あるいは宋代にかけて黒色火薬へと発展し、ついで宋代においては黒色火薬を用

いた火薬兵器、ついで爆仗、さらには烟火へと発展したものと思われる。

謝 辞

本稿執筆にあたりたえず御激励と示唆を与えて下さった興和株式会社、研究開発部長、高取吉太郎博士、および図書閲覧の御便宜を御取り計らい下さった名城大・薬・教授伊藤一男博士に深甚の謝意を表します。

文 献

- 1) 馮家昇; 火薬の発明和西伝, 華東人民出版社, 1954.
- 2) 趙鉄寒; 火薬の発明, 国立歴史博物館, 1960.
- 3) Marshall, A.; Explosives, its history & Manufacture. J. & Churchill, Lond, 1915.
- 4) 李時珍; 本草綱目, 1596.
白井光太郎監訳国訳; 本草綱目, 春陽堂出版, 1929.
- 5) Buchanan, R.E. et al; Determinative Bacteriology, Williams & Willkinsons, 1974.
- 6) 張仲景; 神農本草經, 220, (神農本草經新注, 1935)
- 7) 陶弘景; 名医別録, (那琦; 重輯名医別録, 国際書局, 1977)
- 8) 陶弘景; 神農本草經集注. (小島尚真他; 重輯本草經集注, 南大阪印刷センター, 1672)
- 9) 寇宗奭; 本草衍義, 1116.
- 10) 宮道悦男; 薬史学雑誌, 9, 28, 1974.
- 11) 魏伯陽撰; 周易参同契, B. C. 220.
- 12) 劉安撰; 淮南子, B. C. 122.
- 13) 郭璞撰; 山海經, 276~324.
- 14) 葛洪撰; 抱朴子, 303~317.
- 15) 劉向撰; 列仙伝, B. C. 6.
- 16) 葛洪撰; 神仙伝, 303~317.
- 17) 李昉等奉勅撰; 太平御覧, 982.
- 18) 張君房撰; 雲笈七籤, 960~1279.
- 19) 李昉等奉勅撰; 太平広記, 978.
- 20) 孫思邈撰; 真元妙道要略, 300. (道藏洞神部衆術類, 芸文書館, 1926)
- 21) 孫思邈撰; 諸家神品丹法, 682. (道藏洞神部衆術類, 芸文書館, 1926)
- 22) 清虚子撰; 鉛汞甲辰至宝集成, 808. (道藏洞神部衆術類, 芸文書館, 1926)
- 23) 曾公亮撰; 武経総要, 1044.
- 24) 岡田登; 投稿中. 岡崎短大研究報告, 12, 1979.

漢 方 文 献 の 検 索 法^{*1}(第1報)

久保 道德^{*2}, 谿 忠人^{*2}, 小曾戸 洋^{*2}
森山 健三^{*2}, 木村 善行^{*2}, 有地 滋^{*2}

References of Chinese Traditional Medicine^{*1)} (part 1)

Michinori KUBO^{*2)}, Tadato TANI^{*2)}, Hiroshi KOSOTO^{*2)}
Kenzo MORIYAMA^{*2)}, Yoshiyuki KIMURA^{*2)}, Shigeru ARICHI^{*2)}

I. はじめに

中国で発生した医療法を「漢方」と我国では称している。

漢方医学は分析的思考法で発達してきた西洋医学思想とは異なり、診察、治療および治療に用いる生薬の組合わせ(処方)など、すべてにわたり有機的な総合性を重要視した医療法であるといえる。

しかも、漢方医学は中国における人文科学的思想と密接な関係を持ち、理想を過去に設定して思考する方法がとられるとともに、陰陽・五行・経絡・運氣などの理論を基礎として体系化されている。また時代背景、生活環境などに応じてその性質を異にする傾向も少なからずある。さらに病名についても西洋医学の特定部位による分類とは対照的に全身把握主義的な特徴をもっている。

このようなことから、近代科学を学んだ現代人にとって漢方医学は理解し難く、また誤解される面の多い原因ともなっている。しかしながら漢方医学は疾病の治療に関して十分な実用性を備えていることは事実であり、漢方文献には医学薬学に関する無尽蔵のテーマがかくされていると考えられる。したがってそれを応用し現在に役立てていくには単に漢

方を非科学的な経験医療と決めつけることなく、過去の文献を正確に把握することが必要である。

これらにもとづいて今回漢方医書の成立過程、文献内容について論じ、書誌学的な考証を加え、過去の事実の正しい認識を目的として漢方文献検索法を記し考察した。

第1報では素問・靈樞・太素・難経について報告する。なお参考図書の紹介は現在入手可能なものおよび重要なものに限った。

II. 中国医学の発生

中国における医術の発生も他の例にもれず呪術師、巫すなわちシャーマンらの手によって行なわれた。その後、純医学が芽生え、B. C. 90年頃に成立した史記¹⁾の扁鵲倉公伝には、不治の病の一つに「信巫不信医」(巫を信じて医を信じないもの)を挙げている。したがってこの頃には既にシャーマニズムを排斥し、純医療学的学問体系が確立されつつあったと思われる。さらに周礼²⁾などの古典に見える記載からもこれをうかがうことができる。

また基礎医学のテキストである素問³⁾の異法方宜論には地域によって種々の異なった医療方法のあったことが記されている。現在で

*1) 日本薬学会98年会(1978年4月)で発表

*2) 近畿大学東洋医学研究所

Research Institute of Oriental Medicine, Kinki University.

Location; 380 Nishiyama, Sayama-cho, Minamikawachi-gun, Osaka 589

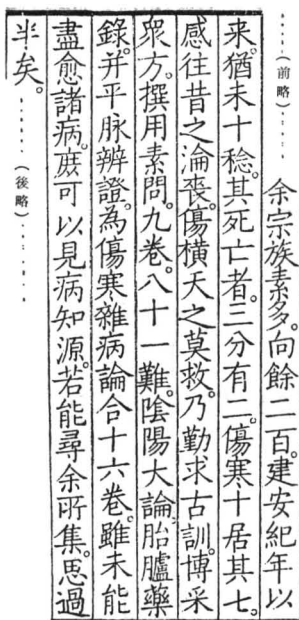


Fig. 1 傷寒論の序文

は針灸術(黄帝内経)・神仙術(神農本草経)・純薬物療法(傷寒雜病論)がそれぞれ独立して発達したと考える三大文化圏説⁴⁾が一般化されている。しかしながらこの説の論拠は甚だ曖昧なものであり、また傷寒論⁵⁾の序文(Fig 1)に多くの書を参照して完成したということが記されているように多分に地域差はあったにせよ、各医療手法は互いに関連しつつ発達したと考える方が妥当であろう。このことから以下に述べる中国の医学・薬学の古典(漢方文献)を研究する上でも、相互に関連づけて検討することが必要である。

III. 黄帝内経について

黄帝内経は現存する中国最古の医学書であり、現在「素問」・「靈樞」および「太素」のテキストが存在する。黄帝は中国の伝説上、漢の孔安国の尚書の序⁶⁾によると伏羲・神農とともに三皇に属し、その著書は三墳と称されている。すなわち「周易」・「神農本草経」・「黄帝内経」の三書である。黄帝は伝説上では約4700年前の人にあたると推定されている⁷⁾が、もとより実在の人物ではなく、その著書とされる黄帝内経も、あくまで後世の人

が黄帝を尊敬してその名を冠したものであろう。

この書は同一人物によって書かれたものではなく、各篇によって秦をはるかに遡ると考えられるものや、あるいは後漢の作と推量されるもの、さらには六朝時代の衍文と思われるものまでが混在し、したがってその理論も篇によって趣きを異にするものもある。その成立年代に関しては諸説⁸⁾があるが、有史以来、多くの経験と文献の集積によって前漢中期にはほぼその原型が成り、後漢初期(1世紀頃)にはその体裁が整えられていたと考えるのが穏当なところであろう。

III. 1 素問について

黄帝内経の名は漢書芸文志⁹⁾に「黄帝内経十八卷」と見えるのが最も古い。皇甫謐(282年没)はその著甲乙経の序で「黄帝内経十八卷は今の鍼経九卷・素問九卷、合わせて十八卷がこれにあたる。」¹⁰⁾といい、これに拠って素問・靈樞の二書が黄帝内経に相当するという説が一般に定着しているが、漢書芸文志の「黄帝内経」と素問・靈樞は全く別本であると指摘する説¹¹⁾もある。

素問の名が最初に見えるのは傷寒論(217年頃成立)の序文で、「撰用素問九卷……」(Fig 1)とあり、ここでの九卷とは現在の靈樞に相当するというのが定説である。また隋書経籍志¹²⁾には「黄帝素問九卷」が記載されている。素問という名称についても諸説があるが、素とは太素すなわち人間おける最も根源的なもの、問とは臣下との問答と解釈¹³⁾されている。

現在見られる素問の伝本は成立当時の姿をそのまま伝えている訳ではなく、他の多くの古典と同様に散佚・改竄・再篇などの運命をたどっている。南北朝時代に全元起が素問の訓解本九卷いわゆる全元起本を著しているが現在には伝わらない。隋のころには既に第七卷目が失なわれていたらしく¹⁴⁾、唐代になって王冰がそれらを見つけ出した¹⁵⁾として全九卷を揃え、それに註釈をつけており、これは次註本と呼ばれている。第七卷目は現在の運

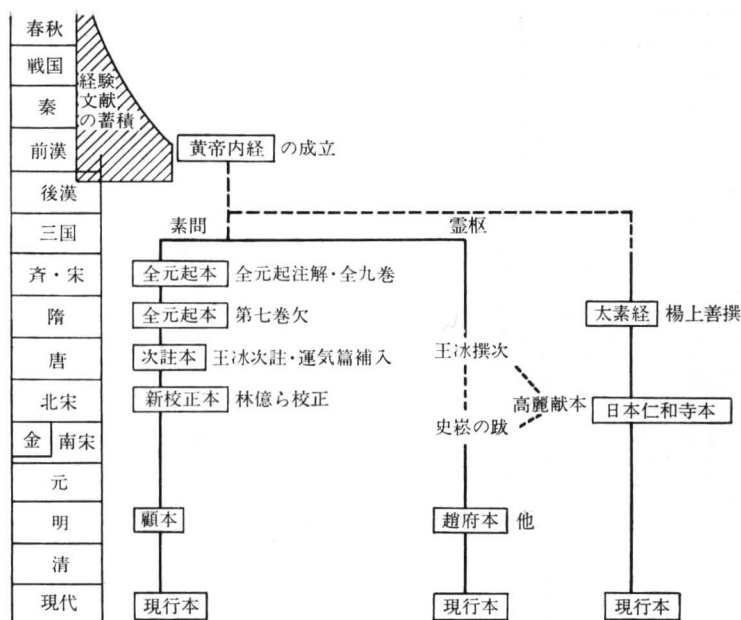


Fig. 2 「黄帝内经」の成立と伝本

気篇に該当し、後述する新校正本に引かれる全元起本の篇目や太素にはこれらの篇が見当たらないことから、これが王冰の竄入であることはほぼ疑いの余地はないが、王冰自身の偽作であるとは思われず、恐らく何らかの古典から引用して挿入したものであろう。これは運氣篇の本文と王冰の註文との間に微妙な食い違いのあることによって察せられる。この次註本もそのものは現存しない。

北宋になって大がかりな医書校勘すなわち宋改が林億ら宋臣の手によって行なわれ、素問もこの次註本・全元起本および後述する太素経などのテキストを校合して校正された。これが新校正本と称されるもので、現存する唯一の素問のテキストである。この新校正本によって全元起本の篇目の巻数やその註の一部、および次註本の註文のほぼ総てを知ることができる。新校正本は宋本とも呼ばれるが、宋代の原刊は伝存しない。明代にそれを顧從徳が模刻したものが数部存在し、復刻されて現在一般に流布しており、顧本と称されるものがそれである。

素問は黄帝と岐伯以下6人の臣下との問答形式で書かれ、主に生理・衛生・病理・薬理

などの基礎医学とも言える理論が詳説されている。また前述の運氣篇には気候の予測とその影響、それに起因する病気の治療法が述べられており、王冰の挿入といえども軽視できないものである。素問の刊本とその参考図書を TABLE I に示した。

TABLE I 素問の刊本とその参考図書

a) 原書

- ・“重広補注黄帝内经素問”，活字本，上海商務印書館，上海，1954.
- ・“重広補注黄帝内经素問”，活字本，旋風出版社，台北，1974.
- ・“重広補注黄帝内经素問”，顧從徳本影印，国立中国医薬研究所，台北，1971.
- ・“重広補注黄帝内经素問”，顧從徳本影印，芸文印書館，台北，発刊年次不明.
- ・“素問王冰注”，四部備要本，台湾中華書局，台北，1974.
- ・“黄帝内经素問”，医統正脈全書，第1冊，新文豊出版公司，台北，1975.

b) 中国における解説書および参考図書

- ・劉完素，“素問玄機原病式”，医統正脈全書，第7冊，新文豊出版公司，台北，1975.
- ・馬玄台，“素問註証發微”，東方会，東京，1977.
- ・馬玄台・張隱庵，“合註黄帝素問靈枢合編”，台

聯国風出版社，台北，1968。

- ・張介賓，“類經”，國際書局，台中，1974。
- ・張介賓，“類經”，東豐書店，東京，1978。
- ・張介賓，“類經”，経絡治療学会，東京，1978。
- ・李中梓，“内経知要”，商務印書館香港分館，香港，1971。
- ・汪詡，“素問靈樞類纂約註”，旋風出版社，台北，1974。
- ・皇甫謐，“黃帝針灸甲乙經”，台聯国風出版社，台北，1975。
- ・“内経講義”，北京中医學院編，医業衛生出版社，香港，1969。

c) 日本江戸時代における解説書

- ・多紀元簡，“素問識”，皇漢医学叢書，第1冊，大新書局，台北，1975。
- ・多紀元堅，“素問紹識”，皇漢医学叢書，第1冊，大新書局，台北，1975。
- ・岡本一抱，“内経素問診解”，古典鍼灸研究会，東京，1970。

d) 現代日本における解説書・参考図書および文献

- ・矢数有道，“素問活用論文集成”，後世要方積義と合編，自然社，東京，1977。
- ・丸山昌朗，“校勘和訓黃帝素問”，黃帝素問刊行会，東京，1963～1964。
- ・丸山昌朗，“素問の栞”，黃帝素問刊行会，東京，1964。
- ・小曾戸丈夫・浜田善利，“意釈黃帝内経素問”・“意釈黃帝内経運氣”，築地書館，東京，1971。
- ・柴崎保三，“黃帝内経素問新義解”，東京高等鍼灸学校研究部，東京，1973～1977。
- ・森田幸門，“素問入門”，森田漢方治療研究所，大阪，1973。
- ・藤木俊朗，“素問医学の世界”，續文堂，東京，1976。
- ・小栗英一・戴内清，“黃帝内経素問”，世界の名著，続1，中国の科学に収録，抄訳，中央公論社，東京，1975。
- ・丸山昌朗，日本東洋医学会誌，13(2)，23(1962)。
- ・岡西為人，漢方，1(7)，35(1955)。

III. 2 靈樞について

靈樞の名が見える最も古い文献は素問¹⁶⁾の王冰序で，その他，隋書經籍志¹²⁾には①「黃帝鍼經七卷」，旧唐書經籍志¹⁷⁾には②「黃帝鍼灸經十二卷」・③「黃帝鍼經十卷」・④「黃帝九靈經十二卷靈寶注」，唐書芸文志¹⁸⁾には

⑤「黃帝鍼灸經十二卷」・⑥「黃帝鍼經十卷」・⑦「靈寶注黃帝九靈經十二卷」，宋志芸文志¹⁹⁾には⑧「黃帝靈樞經九卷」・⑨「黃帝鍼經九卷」・⑩「黃帝九虚内経五卷」などの記載がある。これについて林億らは素問²⁰⁾王冰序の注で「張仲景²¹⁾や王叔和の脈經²²⁾では『九卷』とし，隋書經籍志²³⁾では『九靈』とあるが，王冰がこれらに『靈樞』と名づけたのである。」と記している。また丸山²⁴⁾は①・③・④・⑥・⑦・⑩の書は書名こそ相違するがその内容は同一であると断定している。

靈樞の成立に関しては古くは皇甫謐¹⁰⁾をはじめ，杭世駿²⁵⁾，馬玄台²⁶⁾，姚際恒²⁷⁾，多紀元簡²⁸⁾，多紀元胤²⁹⁾らが論じており，素問と同時に成立したとするものから，素問より古いとするもの，それより新しいとするもの，また王冰の偽作とする説などがある。丸山は素問・靈樞の内容を詳細に検討した上，その撰述態度と時代の相違を考証し，素問の撰次(最終的に編集された)時代を後漢初期¹¹⁾に，靈樞を後漢中期³⁰⁾と推定しているが，これは傾聴に値する説であると思われる。

北宋の林億らによる宋改(1061～1069年)の頃には既に靈樞の完本は失なわれていたらしく，素問の校勘には用いられている³¹⁾が，それ自体は校勘されていない。その40数年後(1093年)の高麗からの献本によって始めて完本が知られたといわれる³²⁾。現存の靈樞³³⁾には紹興二十五年(1155年)の史松の跋があり，これは恐らく高麗献本にもとづいたものであると考えられる。

靈樞は主に診断法・治療法・針の刺法などの臨床医学について論じられている。また素問に較べると格調高い名文はさほど多く見られず，ややもすれば軽んじられた³⁴⁾傾向にあったが，これは実際の臨床家によって著述されたことを裏付けるもので，その臨床応用の価値は極めて高い。素問と重複するものは省き，靈樞の刊本とその参考図書を TABLE II に示した。

TABLE II 靈枢の刊本とその参考図書

- a) 原書
- ・“黄帝素問靈枢經”，趙付本影印，台湾芸文印書館，台北，発刊年次不明。
 - ・“靈枢經”，活字本，上海商務印書館，上海，1954。
 - ・“靈枢經”，四部備要本，台湾中華書局，台北，1973。
 - ・“黄帝内經靈枢”，医統正脈全書，第2冊，新文豐出版公司，台北，1975。
- b) 中国における解説書および参考図書
- ・馬玄台，“靈枢註証發微”，東方会，東京，1972。
 - ・陳璧琉・鄭卓人，“靈枢經白話解”，劬華文化服務社，香港，発刊年次不明。
- c) 日本江戸時代における解説書
- ・多紀元簡，“靈枢識”，上海科学技術出版社，上海，1964。
 - ・多紀元簡，“靈枢識”，古典鍼灸研究会出版部，東京。
- d) 現代日本における解説書・参考図書および文献
- ・丸山昌朗，“校勘和訓黄帝鍼經”，黄帝素問刊行会，東京，1965～1967。
 - ・小曾戸丈夫・浜田善利，“意積黄帝内經靈枢”，築地書館，東京，1972。
 - ・丸山昌朗，日本東洋医学会誌，15(3)，7(1964)。
 - ・岡西為人，漢方，1(8)，33(1955)。

III. 3 太素について

これは唐³⁵⁾の楊上善が編纂し註解を加えたものであるが，黄帝内經の古態をうかがうことのできる貴重な書であるのでここに併記する。内容的には素問・靈枢を合わせたものであるが，その篇名は全く異なっている。旧唐書經籍志¹⁷⁾に「黄帝内經太素三十卷楊上善注」，唐書芸文志³⁶⁾に「楊上善注黄帝内經太素三十卷」と見え，宋改時の素問の校勘にも用いられている。ところが南宋以後の書録にはその名が見られず^{32b)}，当時の中国では既に亡佚していたと思われる。

我国では天平宝字元年(757年)の勅令に医生の教科書として太素を採用しており³⁷⁾，奈良時代には渡来していたことが判る。その後，我国でもこの書は亡佚したものとわかれてい

TABLE III 太素の刊本と参考図書

- a) 原書
- ・楊上善，“黄帝内經太素”，蕭延平本影印，北京人民衛生出版社，北京，1955。
 - ・楊上善，“黄帝内經太素”，増補珍本図書集成，第2冊，世界書局，台北，1971。
 - ・楊上善，“黄帝内經太素”，盛文堂，東京。
 - ・石原明・丸山昌朗・田口友康，“欠卷覆刻太素”，上，古医典のつどひ，東京，1964。
- b) 現代日本における解説書・参考図書および文献
- ・石原明・丸山昌朗・田口友康，“欠卷覆刻太素”，下，古医典のつどひ，東京，1964。
 - ・矢数有道，漢方と漢薬，10(5)，1(1943)。
 - ・石原明，漢方の臨床，3(9・10・11)，24(1956)。
 - ・石原明，日本東洋医学会誌，12(4)，7(1962)；15(1)，11(1964)。
 - ・岡西為人，漢方，1(8)，33(1955)。

たが，文政三年(1820年)に京都の福井家が仁和寺から平安末期写本の第二十七卷目を入手したことがきっかけとなって調査され³⁸⁾，現在，30巻中27巻が発見されてほぼ太素の全貌が明らかになった。この書は黄帝内經を研究する上で見のがすことのできない資料である。太素の刊本とその参考図書を TABLE III に示した。

IV. 難經について

現存する書古の医書の1つに難經がある。この書は戦国時代の名医，扁鵲が黄帝内經の81の難解な部分について解説した書と言われているが，恐らくは素問・靈枢の成立以後，後漢の作であると推定される。

傷寒論の序文(Fig 1)に「八十一難」とあるのが難經に関する最も古い記載である。その他，隋書經籍志¹²⁾に「黄帝八十一難經二卷，梁有黄帝衆難經一卷呂博望亡亡」，旧唐書經籍志¹⁷⁾に「黄帝八十一難經一卷，秦越人撰」，唐書芸文志¹⁸⁾に「秦越人黄帝八十一難經二卷」と記載されている。あるいは太平御覽³⁹⁾に引かれる皇甫謐の帝王世紀には「黄帝有熊氏命雷公岐伯論經脈傍通問難八十一為難經」とあり，難經は古くは黄帝八十一難經もしくは単に八十一難經などと称されたようである。

秦越人すなわち扁鵲の著作とあるのは無論、漢人の偽託であろう。

伝本については多紀⁴⁰⁾、や岡西⁴¹⁾らの考証があり、詳述はさけるが、現存する最古のものは北宋の王翰林の集注したもの⁴²⁾である。これには既に亡佚した隋の呂博望の注、唐の楊玄操および北宋の丁德用・虞庶・楊康侯らの諸注が収められており、古注を知る上で貴重な存在である。また元の滑伯仁の著した難經本義が注解書として最も有名である。

内容的には脈・経絡・臓腑・病理・病態・経穴・針の刺法について81項目にわたって論じられている。したがって古来より、特に針灸医学の聖典として黄帝内経とともに双壁をなしてきたが、漢方医学全般にわたる研究および臨床応用の価値は高く、黄帝内経・傷寒論・金匱要略の研究資料としても重要な書である。難經の刊本とその参考図書を TABLE IV に示した。

TABLE IV 難經の刊本とその参考図書

a) 中国における解説書
・王翰林, “難經集注”, 台湾中華書局, 台北, 1973.
・王翰林, “難經集注”, 台聯風出版社, 台北, 1978.
・滑伯仁, “難經本義”, 旋風出版社, 台北, 1973.
・滑伯仁, “難經本義”, 医統正脈全書, 第5冊, 新文豊出版公司, 台北, 1975.
・勝万卿, “難經古義”, 医林書局, 香港, 発刊年次不明.
・“難經訳釈”, 南京中医学院医經教研組編, 上海科学出版, 上海, 1961.
b) 日本江戸時代における解説書
・岡本一抱, “難經本義診解”, 東方会, 東京.
c) 現代日本における解説書および文献
・本間洋白, “難經の研究”, 医道の日本社, 神奈川, 1965.
・小曾戸丈夫・浜田善利, “意釈八十一難經”, 築地書館, 東京, 1974.
・丸山昌朗, 日本東洋医学会誌, 25(4), 27(1975).
・岡西為人, 漢方, 2(7), 30(1956).

V. 近年発見された中国最古の医書について

近年、中国では古代中国の遺跡に関する発掘調査が盛んに行なわれ、これに付随して医学書も発見され整理発表されている。このうち特に重要なものとして馬王推医書⁴³⁾と武威医簡⁴⁴⁾が挙げられる。

馬王推医書は1973年、湖南省の長沙で発掘された馬王推3号墓より出した帛書で、文物⁴⁵⁾によると紀元前3世紀の写本であるという。これは数種⁴⁶⁾の医書に分類され、十一脈灸経^{43a)}と名づけられる医書は靈枢・経脈篇および経筋篇の古態を示すものと考えられる。また五十二病方^{43b)}と名づけられる医方書には243種の薬物が記されており、古代薬物療法を知る上で大きな手がかりとなるであろう。

武威医簡は1972年、甘肅省の武威県早灘坡より出土した木簡と木牘で、後漢初期のものと推定⁴⁷⁾されている。この医方書には30処方96種の薬物が記され、素問や傷寒論との関係⁴⁸⁾も想起される。また赤堀^{47a, b)}の研究によると神農本草経との関連が深いという。

これらの医書は後代の手を一切経ない第一級資料とすべきものであり、これによって従来の古代中国医学に関する認識・学説にも少なからず修正を加える必要があろう。

以上、漢方医学の基礎的理論について書かれた素問と、主として針灸医学に重点がおかれた靈枢および難經を中心に論述した。一般に黄帝内経系の医書は針灸医学の古典と見做され、薬学の分野ではさほど重要な書として取扱われないことが多い。ところが特に素問中には随所に薬物に関する基礎的理論⁴⁹⁾が論じられ、薬方もわずかではあるが記載⁵⁰⁾されている。金・元代より興った一連の医学書・本草書⁵¹⁾はみな黄帝内経の理論を源流としたものである。このことからこれらの書は単に針灸医学のみならず、次報⁵²⁾で報告する薬物療法を主体とした医方書である傷寒論・金匱要略とともに中国の医学大系の根幹をなすものである。

Summary

During more than two thousand years, many medical references, formularies, and herbals (Ben Cao) have been issued in Chinese traditional medical science.

In this paper, textbooks and references of Huang Di Nei Jing (黄帝内经), the earliest medical classic compiled probably in the 1st century, are introduced.

文献および脚注

- 1) 司馬遷, “史記”, 宏業書局, 台北, 1976, p. 755.
- 2) 周代の官制を記したといわれる周礼には, 医師に食医・疾医・瘍医・獸医の別があり, それぞれの治療があったことが記されている. “周礼”, 菜根出版, 東京, 1976, 上巻, pp. 60~63.
- 3) “重広補註黄帝内经素問”, 第2版, 国立中国医薬研究, 台北, 1971, 第四巻, 一丁.
- 4) 長浜善夫, “東洋医学概説”, 第1版, 創元社, 大阪, 1961, p. 144, p. 66.
- 5) “明刊影印傷寒論”, 第2版, 燎原, 東京, 1973, pp. 6~7.
- 6) 諸橋徹次, “大漢和辞典”, 第4刷, 第1巻, 大修館書店, 東京, 1974, p. 124. から援引.
- 7) 陳存仁, “中国医学史図鑑”, 第1版, 香港商務印書館, 香港, 1968, p. 20.
- 8) a) 富士川は B. C. 約 200 年頃に成立したと推定している. 富士川游, “支那思想・科学(医学)”, 岩波講座, 東洋思潮, 岩波書店, 1934, 東京, p. 11, 日本古医学資料センター復刻版; b) 藤堂明保は成立の年代を秦から前漢の始めと推定している. 柴崎保三, “黄帝内经素問新義解”, 第2版, 第1巻, 東京高等鍼灸学校研究部, 東京, 1937, p. 12.; c) この他, 内藤虎次郎・赤松金芳・大島蘭三郎・平岡禎吉らの諸説がある. 丸山晶朗, “鍼灸医学と古典の研究”, 第1版, 創元社, 大阪, 1977, p. 250.
- 9) “中国歴代芸文志”, 第1版, 遠東図書公司, 台北, 1956, p. 15.
- 10) 「按七略芸文志黄帝内经十八巻今有鍼經九巻素問九巻二九十八巻即内经也」皇甫謐, “黄帝鍼灸甲乙經”, 第2版, 台聯国風出版社, 台北, 1975, p. 3.
- 11) 文献 8 c) の p. 256.
- 12) 文献 9) の p. 100.
- 13) 丸山晶朗, “素問の栞”, 第1版, 黄帝素問刊行会, 東京, 1964, pp. 2~7.
- 14) 隋書經籍志に「黄帝素問八巻全元越注」(越は起の誤りか)とあるところから全9巻のうち1巻が欠けていたと想像される. 文献 a) の p. 101.
- 15) 素問の王冰序に「於先生郭子齋堂受得先師張公秘本」とあり, 林億らの註ではこれを運氣七篇にあてている. 文献 3) の第一巻, 四丁.
- 16) 文献 3) の第1巻, 三丁.
- 17) 文献 9) の pp. 231~232.
- 18) 文献 9) の p. 306.
- 19) 文献 9) の p. 441.
- 20) 「漢張仲景及西晋王叔和脈經只為之九巻……按隋書經籍志謂之九靈王冰名為靈樞」. 文献 3) の第一巻, 三丁.
- 21) 傷寒論の著者, Fig. 1.
- 22) 王叔和, “王叔和脈經”, 古典鍼灸医術研究会, 鎌倉, 1974~1949.
- 23) 隋書經籍志には九靈の名は見あたらない. 恐らく旧唐書經籍志¹⁷⁾あるいは唐書芸文志¹⁸⁾の誤りであろう.
- 24) 文献 8 c) の pp. 262~263.
- 25) 抗世駿, “道古堂集”. 多紀元胤, “医籍考”, 皇漢医学叢書, 第3冊, 大新書局, 台北, 1975, pp. 53~54. から援引.
- 26) 馬玄台・張隱庵, “合註黄帝素問靈樞合編”, 台聯国風出版社, 台北, 1968, p. 1.
- 27) 姚際恒, “古今偽書考”, 多紀元胤, “医籍考”, 皇漢医学叢書, 第3冊, 大新書局, 台北, 1975, p. 54. から援引.
- 28) 多紀元胤, “靈樞識”, 上海科学技術出版社, 上海, 1964, 綜概, pp. 1~9.
- 29) 多紀元胤, “医籍考”, 皇漢医学叢書, 第3冊, 大新書局, 台北, 1975, p. 56.
- 30) 文献 8 c) の pp. 262~275.
- 31) 素問の新校正注には多く靈樞を用いて校勘してある. たとえば文献 3) の第十七巻, 二丁など.
- 32) 宋史哲宗紀に「元祐八年正月庚子詔頒高麗所獻黄帝鍼經于天下」とあり, 王応麟の玉海に「元祐八年高麗所獻書有黄帝鍼經九巻」と見えることから, 多紀元胤はこのように考証している. a) 文献 29) の p. 55.; b) 岡西為人, 漢方, 1(8), 33(1952).
- 33) “黄帝素問靈樞經”, 趙府本影印, 芸文印書館, 台北, 発刊年次不明, 叙, 一二丁.
- 34) 朱熹は「素問語深靈樞淺較易」と述べている. 文献 29) の p. 50. より援引.
- 35) 一般には隋とされているが, 矢数は唐と断定している. 矢数有道, 漢方と漢薬, 10(5), 1(1943).
- 36) 文献 9) の p. 307.
- 37) 富士川游, “日本医学史”, 真理社, 東京, 1952, p. 47.
- 38) 矢数有道, 漢方と漢薬, 10(5), 1(1943).
- 39) “太平御覧”, 第2版, 第6冊, 台湾商務印書館, 台北, 1974, p. 3325.
- 40) 文献 29) の pp. 73~100.
- 41) 岡西為人, 漢方, 2(7), 30(1953).
- 42) TABLE IV a) の“難經集注”がそれである.
- 43) a) 馬王堆漢墓帛書整理小組, 文物, 1975年 第6期, pp. 1~5.; b) 馬王堆漢墓帛書整理

- 小組，文物，1975年第6期，pp. 35～48.
- 44) “武威漢代医簡”，甘肅省博物館・武威縣文化館編，文物出版社，北京，1975.
- 45) 鍾益研・凌襄，文物，1975年第9期，p. 50.
- 46) 文物によるとそれぞれ足臂十一脈灸經（甲，乙本），脈法，陰陽脈死候，却穀食氣，導引図に分類・命名されている。
- 47) a) 赤堀昭，東方學報，第50冊，75(1978)；
b) 赤堀昭，日本医史學雜誌，24(1)，1(1978).
より援引。
- 48) a) たとえば伏梁と名づけられる病名は素問の腹中論，奇病論および難經五十五難にも見える；b) たとえば治傷寒逐風方の処方傷寒論との関連を思わせる。
- 49) たとえば湯液醪醴論をはじめとし，特に至真要大論には君臣佐使説など，藥物の運用法が詳述されている。後者は前述の運氣七篇に属する。また病態論に記載される沢瀉・朮・麋銜の処方は傷寒論，桂枝湯の条文と関連すると考えられる。
- 50) 素問中に6方，靈樞中に5方，計11方が記載されている。
- 51) 医学書としてはいわゆる金元の四大家，劉完素・張子和・李東垣・朱丹溪の著書が代表的なものである。本草書には東垣の用藥法象，王好古の湯液本草などがあり，これらの流れを汲んだ医方を我国では後世派と称している。後代，本草綱目にも多大な影響を与えている。
- 52) 久保道德，谿忠人，小曾戸洋，森山健三，木村善行，有地滋，藥史學雜誌13(2)，58(1978)。

漢方文献の検索法^{1*)} (第2報)^{2*)}

久保 道德^{*3)}, 谿 忠人^{*3)}, 小曾戸 洋^{*3)}
森山 健三^{*3)}, 木村 善行^{*3)}, 有地 滋^{*3)}

References of Chinese Traditional Medicine^{*1)} (part 2)^{*2)}

Michinori KUBO^{*3)}, Tadato TANI^{*3)}, Hiroshi KOSOTO^{*3)}
Kenzo MORIYAMA^{*3)}, Yoshiyuki KIMURA^{*3)}, Shigeru ARICHI^{*3)}

前報^{*2)}では中国最古の医学書である黄帝内経・難経を中心に述べたが、本報では傷寒論・金匱要略について解説する。素問では主に基礎医学理論について、靈樞・難経ではとくに針灸などの物理療法を中心とした臨床医学に関して著述されているが、これらの書や、当時現存した医学書・医方書・本草書を参考にして3世紀初めに傷寒雜病論が成立した。この書は薬物療法を主体とした臨床医学書で、実際の疾病に対する応用価値は極めて高い。その後、中国において多くの漢方医学書が著わされたが、本質的にはこの書に比肩しうるものはついに現われなかった。その価値が1700年以上もたった現在も少しも減ずることなく、その生命を現在まで保っていることは実に驚嘆すべきことである。

I. 傷寒雜病論について

現在伝わる傷寒論・金匱要略の2書は漢方医学における最も貴重な文献であり、この書なくして現在の漢方は成り立たないであろう。また他の漢方文献に及ぼした影響は計り知れない。

この2書はともに後漢の長沙の太守であった張仲景の著になるとされ、もとは一つの書

であったと考えられている。その原書がどのようなものであったか現在明確に知る事はできないが、各書に引用された書名および巻数をTABLE Iに示した。これらの記載は一定していないが、ほぼ同系統のものであったことは類推できる。「卒」の字に関しては「雜」の錯字であると考証され⁹⁾、これに対しては異論もあるが¹⁰⁾、ここでは一応それに従って傷寒雜病論に統一しておく。また張仲景なる人物についても若干の説話は伝わっている¹¹⁾が、いずれも正史に載せられたものではなく、古来より論議の絶えないところである。

傷寒雜病論著述の動機に関しては序文¹²⁾に「自分の一族はもと多人数で以前は200人余

TABLE 1 諸本に引用された張仲景の書

「傷寒卒病論集」	(傷寒論自序 ¹⁾)
「傷寒雜病論 十六卷」	(傷寒論自序 ¹⁾)
「仲景選論」	(甲乙經自序 ²⁾)
「張仲景方論 三十六卷」	(高湛養生論 ³⁾)
「張仲景辨傷寒十卷」	(阮孝緒七錄 ⁴⁾)
「張仲景方十五卷」	(隋書經籍志 ⁵⁾)
「張仲景藥方十五卷」	(旧唐書經籍志 ⁶⁾)
「王叔和張仲景藥方十五卷 又傷寒卒病論十卷」	(唐書藝文志 ⁷⁾)
「仲景傷寒論 十八卷」	(外台秘要 ⁸⁾)

*1) 日本薬学会98年会(1978年4月)で発表

*2) 久保道德, 谿忠人, 小曾戸洋, 森山健三, 木村善行, 有地滋, 薬史学雑誌, 13 (2), 50 (1978).

*3) 近畿大学東洋医学研究所

Research Institute of Oriental Medicine, Kinki University.

Location; 380 Nishiyama, Sayama-cho, Minamikawachi-gun, Osaka 589

りもいたが、建安紀年(196年)以来10年もたないうちに死亡者は3分の2にも及び、傷寒で死亡したものはそのうち7割であった。このことから傷寒雜病論十六卷を作った」と述べられている。

さて、傷寒雜病論は成立後間もなく晋の太医令であった王叔和の撰次にかかり、甲乙經²⁾の序に「近代太医令王叔和撰次仲景選論」、高湛養生論³⁾に「王叔和……編次張仲景方論」などと記されている。この王叔和なる人物についても若干の資料があり¹³⁾、三国から晋初め(3世紀)の人と思われるものの、詳細は不明である。

現存する傷寒論・金匱要略の二書は、時代はともかくこの張仲景の傷寒雜病論より分出したものと考えられる。これに関して、傷寒

雜病論全16卷のうち10卷が今の傷寒論で、残りの6卷が雜病論、すなわち金匱要略の原書にあたると考証され¹⁴⁾、これが一般の見解となっている。しかしながら16卷本以外の書も存在したと考えられるので、この説はあくまで推測の域は出ず、多くの問題点が残されている。

その後、宋代に至るまでに傷寒論・金匱要略の伝本はかなり混乱していたと思われ、林億ら宋臣の手によって治平二年(1065年)¹⁵⁾に傷寒論、治平三年(1066年)¹⁶⁾にその異本である金匱玉函経、また同じころ¹⁷⁾に金匱要略が校刊された、現在一般に我々が傷寒論・金匱要略と称するものはこれらの書にもとづいている。

傷寒雜病論の変遷と伝本について整理し図

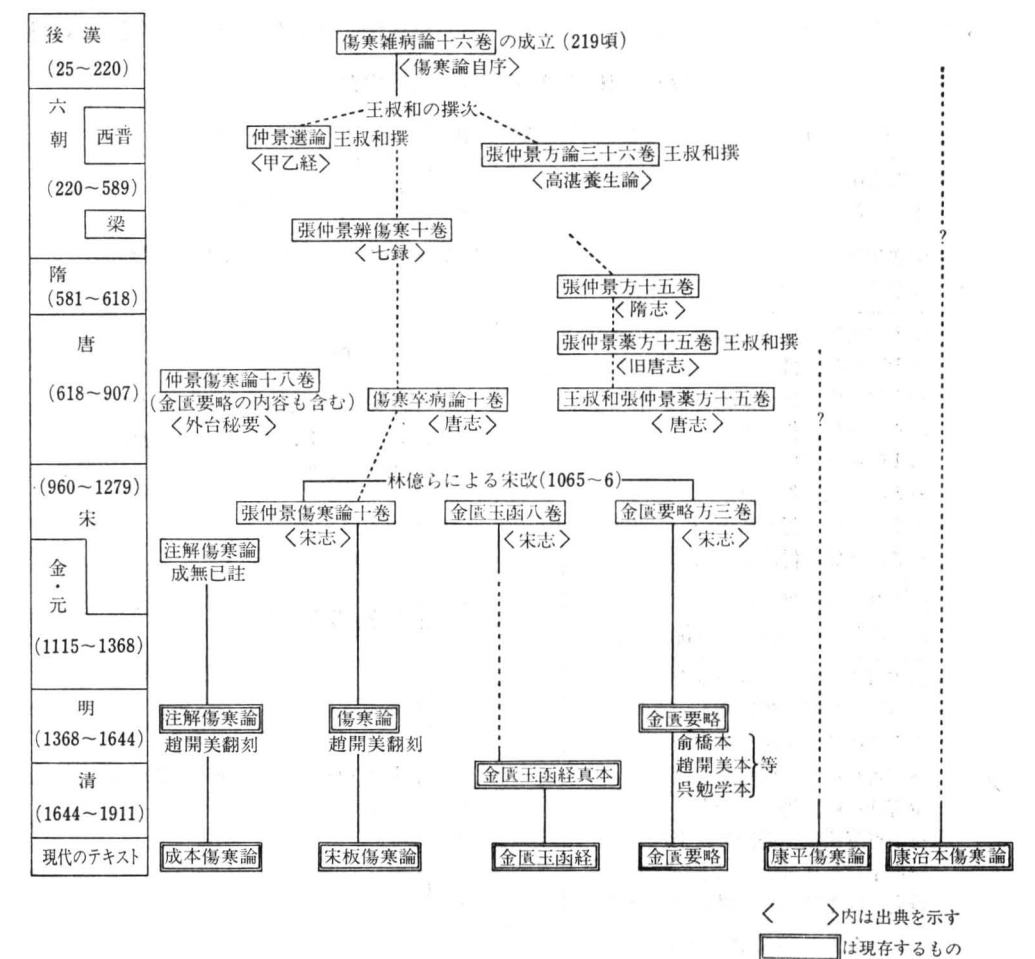


Fig. 1 傷寒雜病論の変遷と伝本

表化したものを Fig. 1 に掲げた。これからも判る通り、とくに宋以前のものに関しては多くの疑問点がある。しかしながら、①唐代の外台秘要⁸⁾には18巻本からの引用があって、これには出典巻数が付記されている。②脈經^{13c)}・諸病源候論¹⁸⁾・千金要方¹⁹⁾・千金翼方²⁰⁾・肘後備急方²¹⁾など宋以前の古典にも傷寒論・金匱要略からの所引と思われる部分がある。③敦煌からは現在の傷寒論辨脈法に相当する文書が発見されており、その研究も行なわれている²²⁾。などの資料もあり、傷寒論・金匱要略の原典およびその変遷に関する考証の余地は残されているものと考えられる。

II. 現行本傷寒論について

現行の傷寒論は宋板^{31c)}によれば112の薬方と72種の薬物から構成されており、約39,000字からなる小冊本である。この書は古くから

「其言精而奥其法簡而詳」²⁴⁾「文辞簡古奥雅」²⁵⁾といわれるように、一見簡単でむだのない文章で書かれているが簡略であるがために却ってその奥義が極め難く、研究者によってその解釈を大いに異にするところの多い所以でもある。

現在最も一般的な宋板傷寒論²³⁾と成本傷寒論²⁶⁾とは共に22篇より成り、その内容と他の異本との関係は TABLE II に示した。第一篇より第四篇までは病理・診断のいわば総論ともいふべき部分であり、薬方は記されていない。辨脈法・平脈法には文字通り脈法を中心に診断法が記され、第五篇以下に出てくる用語の定義、基本的理論などが述べられている。一般には傷寒論中には五行説は混入していないといわれるが、平脈法には明らかにその記載があり、素問の記載にも相通ずる部分がある。傷寒例には季節と病気との関係や、傷寒

TABLE II 傷寒論の篇目とその内容

宋板・成本の篇目	A*	B	内容の概要
辨脈法第一 平脈法第二	×	×	脈法についての総論
		×	
傷寒例第三 辨瘧濕喝病第四	×	(×)	傷寒あるいはそれに似た病気についての総論
辨太陽病脈証併治上第五 辨太陽病脈証併治中第六 辨太陽病脈証併治下第七 辨陽明病脈証併治第八 辨少陽病脈証併治第九 辨太陰病脈証併治第十 辨少陰病脈証併治第十一 辨厥陰病脈証併治第十二			太陽病から厥陰病まで病態を六経に分類し、その症状とそれに対応する処方の解説
辨霍乱病脈証併治第十三 辨陰陽易差後勞復病脈証併治第十四			傷寒に関連した雑病とその治法
辨不可発汗病脈証併治第十五 辨可発汗病脈証併治第十六 辨発汗後病脈証併治第十七 辨不可吐病脈証併治第十八 辨可吐病脈証併治第十九 辨不可下病脈証併治第二十 辨可下病脈証併治第二十一 辨発汗吐下後病脈証併治第二十二		×	発汗・吐・下法の運用方法について
		×	
		×	
		×	
		×	
		×	
		×	

* A: 金匱玉函経にはない篇
B: 康平本にはない篇を×印で示した。

病の病理や診断法が記されている。瘧湿喝病篇には傷寒病とまぎらわしい瘧病・湿病・喝病の病状が弁別されている。第五篇から第十二篇までは太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰の六経病における病態と治療法が、いわゆる方証相対して記載されている。これらはウイルス・細菌による急性病の経過を帰納して病態を分別したものであろう²⁷⁾が、それ以外の病気にも応用できるものである。また医者への誤治に対する診断・治法も多く記され、当時の医療の一端をうかがうことができる。第十三篇には吐下の激しいコレラ様の病について、第十四篇には大病後に生ずる病についての治法が記されている。第十五篇以下は発汗・吐・下法の運用方法についてまとめられている。

現在の傷寒論中には後人の竄入や注文の混入などがあるといわれ、古来よりその篇目・条文に対する考証・論議が盛んになされているが一定の見解が生ずるには至っていない。一般に第四篇までと第十五篇以下は後人の付加とする説が多く、ほとんどの解説書ではこれらを削除している²⁸⁾。傷寒例に関する限りその疑いは濃厚であるが、とくに辨脈法・平脈法には傷寒論を理解する上で有用な論説があるにもかかわらず難解なためか、このように敬遠されがちである。ところが同じく王叔和の撰になる脈経²⁹⁾には張仲景論脈として平脈法とほぼ同文が見られ、三木の考証^{22a)}によっても張仲景脈書とも称すべき書が存在したことはほぼ疑いなく、王叔和自身の所作であるとは認め難い。このほか王叔和あたりの付加といわれるものが随所にあるが、たとえばそうであるとしても傷寒論応用の上からも削除すべきものではなく、森田³⁰⁾や荒木^{9b)}らの指摘する如く、傷寒論中のこれらの記載は重要なものと考えられる。

傷寒論の底本には現在大きく分けると5種類の異本がある。各本によって条文や処方に違いがあるので、底本をいずれにとるかは重大な意味を持つ。以下、それぞれについて略記する。

II. 1 宋板傷寒論

これは前述した北宋時の林億ら宋臣の校正した勅版本にもとづくものである。この書は治平三年(1065年)に刊行され、元祐三年(1088年)に小字本が出版されたことが巻頭に付記されている。恐らく当時伝存する傷寒論を集めて厳重な校勘が行なわれたと思われ、伝存するテキストのうちでは最も信頼のおけるものであろう。この原刊本は現存しないが、明の万暦年間(1573～1620年)に趙開美が翻刻したもの²³⁾があり、現在復刻されて入手は容易である。また江戸時代に我国で翻刻されたものの³¹⁾もある。

II. 2 成本傷寒論

金の成無己が注解をほどこした「注解傷寒論²⁶⁾」あるいはこれを底本にとったものを成本と称し、最も広く用いられた傷寒論である。部分的な字句や方剤の配列などを除いて構成は大略のところ宋板と同じく、10巻22篇から成っている。注解傷寒論は傷寒論の注本としては最も古く、素問・靈枢などの説を引用して解釈を加えてある。江戸時代に香川修庵が、これを底本として注解と薬物の修治部分を去り、条文の行を変更せず小さくまとめたいわゆる袖珍本³²⁾が我国では広く流布し、これは香川本あるいは小刻本と呼ばれる。

II. 3 金匱玉函経

金匱玉函経と名づけられるところから金匱玉函要略方いわずの金匱要略と混同されることがあるので注意を要するが、内容的には傷寒論の異本である。これには宋板および成本に見られる平脈法・傷寒例に相当する部分がなく、証治総例という篇が付されており、処方方は方薬炮製として巻末に一括して掲載されている。この書も林億らによって治平三年(1066年)に校正・謹上されたことが巻首に記されている。清の康熙五十六年(1717年)に金匱玉函経真本³³⁾と称したものが刊行されており、我国でも延享三年(1746年)に翻刻³⁴⁾されている。一般には広く流布しなかったが、傷

寒論を研究する上では参伍せねばならない異本である。

II. 4 康平傷寒論

康平傷寒論は我国で発見された傷寒論で、康平三年(1060年)の丹波雅忠の奥書があることからこう名づけられる。平安時代に日本に渡来し林億らによる宋改以前のものであるといわれ³⁵⁾、辨脈法と平脈法の2篇がない。15字詰・14字詰・13字詰の文章に書き分けられ、そのうち15字詰の部分が原傷寒論、14字詰の部分がそれに準ずるもの、13字詰で書かれた部分が後人の追論であるとされている³⁵⁾。この書に関しては大塚³⁶⁾の研究があり、石原³⁷⁾・渡辺³⁸⁾らもそれに賛同しているが、富士川³⁹⁾は偽書と断じ、宮下⁴⁰⁾は幕末の国医学者の捏造にかかるものと推定している。

II. 5 康治本傷寒論

この書の由来は唐の貞元二十一年(805年)の写本を我国の比叡山の僧が持ち帰り、唐治二年(1143年)に僧の了純が再写し、それが武州の永源寺に伝わり、更に奥州のある医者が写し、更に河口春龍が写したものの⁴¹⁾といわれ、戸上玄斐が安政五年(1858年)に刊行^{41b)}している。したがって林億らの宋改を経ることなく、さらには王叔和の撰次さえも受けていない傷寒論の真本であると長沢⁴²⁾はいい、荒木⁴³⁾もこれは傷寒論の原始型を示していると論じている。しかしながら竜野^{41a)}は、これを江戸時代の古方家の手になる偽書であると考証し、大塚⁴⁴⁾もこれに賛同しており、一般にはこれを偽書と見るむきが多いようである。

傷寒論の研究は中国はもとより、我国でも江戸時代に古方派と称する派が起ってからは盛んに行なわれ、これほど研究された医学書はない。それ以前に我国で広く行なわれた後世派といわれる学派は李朱医学を中心に黄帝内経の理論を根底としたものであり、また古方家に属するものの中には黄帝内経の説をとって傷寒論・金匱要略を解明しようとしたも

の⁴⁵⁾もあったが、これはあくまで傍流に過ぎなかった。主流となった多くの古方家は黄帝内経の理論、すなわち傷寒論中の陰陽五行説・経絡理論を否定して削除し、吉益東洞に至っては陰陽五行説はおろか太陽から厥陰に至る六経理論あるいは本草の説さえも排斥し、薬徴⁴⁶⁾・類聚方⁴⁷⁾・方極⁴⁸⁾を著わした。これは従来の中国依存の漢方より脱却し、日本独自の漢方を作りあげたものとして評価されるべきであるが、これのみに頼っては東洋医学の真価を知ることはできない。しかしながらこの東洞の業績は多紀一門をはじめとする考証学派もしくは折衷派の活躍する原因の一つともなった。この考証学派の遺業は傷寒論のみならず我々が漢方文献を検索する上で貴重な資料となっている。

このように傷寒論には多くの底本があり、解説書も種々刊行されている。傷寒論の研究に際しては適切な解説書を通読し、その後には必ず原文に取り組み、それを正しく理解することが必要であろう。傷寒論の刊本とその参考図書を TABLE III に示した。

TABLE III 傷寒論の刊本とその参考図書

- | |
|---|
| a) 原書 |
| ・“明刊影印傷寒論”，宋板，第2版，燎原，東京，1973。 |
| ・“宋板示旧傷寒論”，竜野一雄編，漢方医学大系刊行会，東京，1957。 |
| ・“傷寒論”，成無已本，台湾中華書局，台北，1973。 |
| ・“傷寒論”，成無已本，台聯国風出版社，台北，1974。 |
| ・“註解傷寒論”，成無已注，北京人民衛生出版社，北京，1956。 |
| ・“傷寒論”，成無已本，医統正脈全書，第5冊，新文豊出版公司，台北，1975。 |
| ・“傷寒雜病論”，金匱要略と合編，熊本大学薬学部生薬学教室，熊本，1971。 |
| ・“訂字標註傷寒論”，小原蘭映編，方術信和会，東京，1976。 |
| ・“金匱玉函經”，人民衛生出版社，北京，1955。 |
| ・“康平傷寒論”，大塚敬節著臨床応用傷寒論解説に付載，創元社，大阪，1966。 |
| ・“康治本傷寒論”，民族医学研究所，東京，1965。 |

b) 中国における解説書

- ・成無已, “註解傷寒論”, a) 原書の項に既出.
- ・喻嘉言, “傷寒尚論篇”, 新文豊出版公司, 台北, 1976.
- ・呉謙ら, “訂正傷寒論註”, 医宗金鑑, 宏業書局, 台北, 1973. pp. 72~409.
- ・“傷寒論講義”, 成都中医学院編, 医業衛生出版社, 香港, 1970.
- ・承淡安, “傷寒論科学化新註”, 旋風出版社, 台北, 1971.
- ・陸淵雷, “傷寒論今釈”, 文光圖書公司, 台北, 1968.

c) 日本江戸時代における解説書

- ・多紀元簡, “傷寒論輯義”, 皇漢医学叢書, 第6冊, 大新書局, 台北, 1975.
- ・多紀元堅, “傷寒論述義”, 皇漢医学叢書, 第6冊, 大新書局, 台北, 1975.
- ・山田因南, “傷寒論集成”, 皇漢医学叢書, 第6冊, 大新書局, 台北, 1975.
- ・山田因南, “傷寒論集成”, 出版科学総合研究所, 東京, 1976.

d) 現代日本における解説書・参考図書および文献

- ・大塚敬節, “臨床応用傷寒論解説”, 創元社, 大阪, 1966.
- ・竜野一雄, “和訓口語訳傷寒論”, 漢方医学大系刊行会, 東京, 1957.
- ・丸山清康, “全訳傷寒論”, 明德出版社, 東京, 1965.
- ・森田幸門, “傷寒論入門”, 第2版, 森田漢法治療研究所, 大阪, 1966.
- ・奥田謙三, “傷寒論講義”, 医道の日本社, 東京, 1965.
- ・劔持久, “傷寒論考述”, 東明社, 東京, 1968.
- ・傷寒論に関する論文は相当数によるのでここでは省略せざるを得ない. a) “漢方と漢薬”, 第28巻, 総索引, 春陽堂書店, 東京, 1975.; b) 漢方の臨床, 16(1・2), 3~128(1969); c) 日本東洋医学会誌, 総目次索引集, (1969)などの索引を利用して検索せられたい.

III. 現行本金匱要略について

現行の金匱要略は一般に傷寒雜病論の雜病の部であると見做され, 王叔和の撰次, 林億らの宋改を経たものである. Fig. 2 に示す金匱要略⁴⁹⁾の林億らの序文では「翰林学士の王洙が在職中, 国家の図書の虫の喰った書簡中

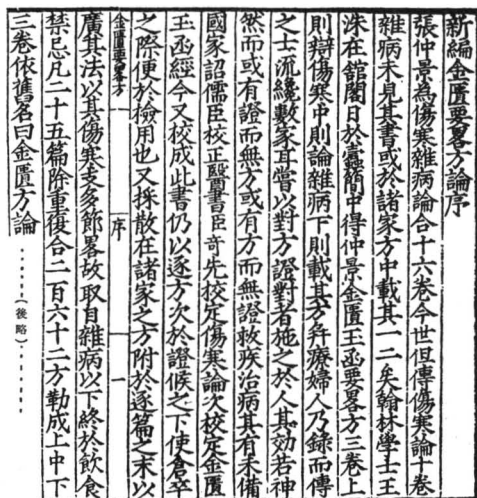


Fig. 2 金匱要略 林億らの序文

から金匱玉函要略方三巻という書を発見し, それには上巻に傷寒が, 中巻に雜病が論じられ, 下巻には処方と婦人療法が書かれていた, そこでこれを書写してその道の数人の学者に伝え実際に試みて絶大なる効果があったが不完全なものであった. ……(中略)……よってその書を集めて校正し, 傷寒の部は節略が多いので削除し, 雜病以下飲食禁忌に至る25篇を整理して上中下3巻を勅成した。」と記されている. したがって雜病の部でもかなり節略されたものと考えられ, 要略といわれる所以でもあろう.

金匱要略⁵⁰⁾は262の処方と191種の薬物から構成されており, 語数は傷寒論よりもさらに少ない. 林億らの序でも述べられているように上・中・下の3巻25篇より構成されている. 第一篇は黄帝内経にも見える「上工治未病」⁵¹⁾の語より始まり, 以下五行説や診断に関する総論が記述されている. ここでの理論は黄帝内経や難経の理論に極めて近い. また内因・外因・不内外因による病因の分類法は, のちに三因極一病証方論⁵²⁾の著述されるものとなった. 第二篇以下は各論で, 傷寒論が六経の病期病態を中心に論述されているのに対し, 種々の雜病が病候別に分類され治方とともに記載されている. したがって同じ方剤でも傷寒論と金匱要略では応用範囲が異なるこ

とが多い。また病名治療という意味では金匱要略の方が傷寒論より実際の臨床応用に便利な面もある。第二十から二十二篇までは婦人の諸病、第二十三篇は救急の際における治方を中心として、また第二十四から二十五篇には飲食の禁忌とその中毒の治方と述べられている。

次に伝本であるが、宋代や元代に刊行されたものは現存しない⁵³⁾。明代に刊行され現存

するものに兪橋本⁴⁹⁾・趙開美本⁵⁴⁾・呉勉学本⁵⁵⁾などがあり、各本によって異字が見られるものの基本的には大差ない。

金匱要略の研究は傷寒論と並び行なわれ、その経緯は傷寒論の項で述べた通りである。ややその研究は傷寒論に偏した傾向はあるが、近畿大学東洋医学研究所診療部門で頻用される方剤のうち傷寒論・金匱要略の薬方が77%を占め、また全頻用処方のうち63%が金匱要略に記載されている⁵⁶⁾。金匱要略は傷寒論に比較していわゆる慢性病について主に論じられている。このようなことから金匱要略の現代病に対する応用価値はむしろ傷寒論を上回るといえよう。金匱要略の刊本とその参考図書を TABLE IV に示した。

以上、第1報・第2報において、漢代までに集成された漢方医学書について論じ紹介したが、中国の医学はこの時点で基本的にはほぼ完全に体系づけられたといっても過言ではない。したがってそれ以降の漢方医学書を検索する上でも、これらの書をふまえた後でないとその流れや全体像を把握することはできない。さらに後世それらは誤って伝えられていることも少なからずあるので、出来る限り原典に遡って調査することが必要である。

また漢方の基礎研究や臨床医学上これらの文献を引用するにあたって、単に書名のみを記すだけでは不十分で、どの版に拠ったかを明記しなければならない。その場合、信頼のおけるものを底本にとるべきことは言うまでもないが、各版本によって錯字・脱字などが見られるので数種を校合して字句を撰択した方が無難である。とくに傷寒論など、伝本の違いによる数種の異本や文献⁵⁷⁾が存在するときには重要な事である。

Summary

In Chinese traditional medicine, Shang Han Za Bing Lun (傷寒雜病論) is a famous formulary. It has been compiled in the beginning of the 3rd century and developed into Shang Han Lun (傷寒論), formulary mainly for acute diseases, and Jin Gui Yao

TABLE IV 金匱要略の刊本とその参考図書

- a) 原書
 - ・“明刊影印金匱要略”，兪橋本，文献 49)。
 - ・“金匱要略”，竜野一雄編，漢方医学大系刊行会，東京，1958。
 - ・“金匱要略方論”，趙開美本，台聯国風出版社，台北，1973。
 - ・“金匱要略”，四部備要本，台湾中華書局，台北，1973。
 - ・“金匱要略”，文献 55)。
- b) 中国における解説書
 - ・尤在涇，“金匱要略心冊”，上海人民衛生出版社，上海，1975。
 - ・尤在涇，“金匱要略心典”，旋風出版社，台北，1974。
 - ・呉謙ら，“訂正金匱要略註”，医宗金鑑，宏業書局，台北，1973，pp. 409~629。
 - ・陸淵雷，“金匱要略今釈”，楽群出版公司，台北，1976。
 - ・“金匱要略講義”，湖北中医学院編，医薬衛生出版社，香港，1973。
- c) 日本江戸時代における解説書
 - ・多紀元簡，“金匱要略輯義”，皇漢医学叢書，第7冊，大新書局，台北，1975。
 - ・多紀元堅，“金匱要略述義”，皇漢医学叢書，第7冊，大新書局，台北，1975。
- d) 現代日本における解説書および文献
 - ・森田幸門，“金匱要略入門”，森田漢方治療研究所，大阪，1974。
 - ・竜野一雄，“和訓口語訳金匱要略”，漢法医学体系刊行会，東京，1958。
 - ・丸山清康，“全訳金匱要略”，明德出版社，東京，1967。
 - ・論文に関しては TABLE III の d) を参照されたい。

Lüe(金匱要略), formulary for chronic diseases. In this paper, textbooks and references of Shang Han Za Bing Lun (傷寒雜病論) are introduced.

文献および脚注

- 1) “明刊影印傷寒論”, 第2版, 燎原, 東京, 1973. p. 5.
- 2) 皇甫謐, “黃帝鍼灸甲乙經”, 第2版, 台聯國風出版社, 台北, 1975, p. 3.
- 3) 太平御覽に引用されたもの. “太平御覽”, 第2版, 第6冊, 台湾商務印書館, 台北, 1974, p. 3329.
- 4) 隋書經籍志に引用されたもの. “中国歴代芸文志”, 第1版, 遠東図書公司, 台北, 1956, p. 101.
- 5) 文献 4) の p. 100.
- 6) 文献 4) の p. 233.
- 7) 文献 4) の p. 307.
- 8) 外台秘要に引用される傷寒論は十八巻で, 第十一巻以降は金匱要略の内容である. たとえば仲景傷寒論から小青竜湯加石膏・越婢加半夏湯を引用し, 「並出第十八巻中」としている. 王燕, “外台秘要”, 文光図書有限公司, 台北, 1975, pp. 283~284.
- 9) a) 多紀元簡, “傷寒論輯義”, 皇漢医学叢書, 第6冊, 大新書局, 台北, 1975, 綜概, p. 3.; b) 荒木正胤, 漢方の臨床, 18(4・5), 32 (1971).
- 10) 大塚敬節, “臨床応用傷寒論解説”, 創元社, 大阪, 1966, p. 32.
- 11) a) 文献 2) の p. 3.; b) 林億らの傷寒論序に引用された名医録. 文献 1) の p. 1.; c) 葛洪, “抱朴子”, 台湾中華書局, 台北, 1973, 内編, 第五巻, 二丁.; d) 古琴疏. 多紀元胤, “医籍考”, 皇漢医学叢書, 第3冊, 大新書局, 台北, 1975, p. 361. より援引; などにその伝が見える.
- 12) 原漢文, 「余宗族素多向余二百建安紀年以来猶未十稔其死亡者三分有二傷寒十居其七……(中略)……為傷寒雜病論合十六巻」文献 1) の p. 6.
- 13) a) “高湛養生論”, 文献 3) の p. 3321, 3329.; b) 文献 2); c) 王叔和, “王叔和脈經”, 古典鍼灸医術研究会, 鎌倉, 1947~1949, 第一冊, 序, 九丁.; などにその伝が見える.
- 14) 多紀元胤, “医籍考”, 皇漢医学叢書, 第3冊, 大新書局, 台北, 1975, p. 395.
- 15) 文献 1) の p. 11.
- 16) “金匱玉函經”, 人民衛生出版社, 北京, 1955, p. 6.
- 17) 岡西の推定による. 岡西為人, “中国医書本草考”, 南大阪印刷センター, 大阪, 1974, p. 196.
- 18) たとえば巻二十九の鼻衄候には金匱要略, 驚悸吐衄下血胸滿瘀血病篇と同文が見られる. また巻三十八の帶下三十六疾候をはじめ張仲景の名も見える. 巢元方, “諸病源候論”, 国立中国医薬研究所, 台北, 1974, p. 112; p. 154.
- 19) たとえばその自序には「張仲景曰」として傷寒論自序と同文が見える. また巻一, 治病略例第三にも引用されている. 孫思邈, “備急千金要方”, 第2版, 国立中国医薬研究所, 台北, 1974序, p. 6; 巻一, p. 2.
- 20) たとえば巻九~十, 傷寒には傷寒論と同文が多出する. 孫思邈, “千金翼方”, 第2版, 国立中国医薬研究所, 台北, 1974, pp. 97~122.
- 21) たとえば巻七, 治食中諸毒方第六十九には金匱要略, 果実菜穀禁忌篇および禽獸魚虫禁忌篇と酷似した条文・治方が多出する. 葛洪, “肘後備急方”, 人民衛生出版社, 北京, 1956, pp. 142~144.
- 22) a) 三木栄, 漢方の臨床, 6(5), 3(1959); b) 渡辺幸三, 日本東洋医学会誌, 8(1), 27 (1957).
- 23) 文献 1) の pp. 1~460.
- 24) 林億らの傷寒論序. 文献 1) の pp. 1~2.
- 25) 陳振孫の語. 文献 14) の p. 363. から援引.
- 26) 成無己, “注解傷寒論”, 北京人民衛生出版社, 北京, 1956.
- 27) 傷寒論の傷寒と記載する証は従来からいわれる腸チフスの類の発熱性急性伝染病ではなく, 発疹熱ないし発疹チフスの類であろうとする研究もある. 野淵紘, 漢方の臨床, 25(8), 3 (1978).
- 28) たとえば TABLE III c) の“傷寒論輯義”, “傷寒論集成”をはじめ大多数.
- 29) 文献 13 c), 張仲景論脈第一, 第五巻, 一丁.
- 30) 森田幸門, 漢方の臨床, 19(3), 27(1972).
- 31) a) “宋板傷寒論”, 山本長兵衛板, 京都, 発刊年次不明.; b) “校正宋版傷寒論”, 浅野元甫編, 風月堂孫助ら, 1797.; c) “新校宋板傷寒論”, 稲葉元熙編, 出雲寺文治郎ら, 京都, 1844.
- 32) “傷寒論”, 香川修徳編, 出雲寺和泉掾, 京都, 1715.
- 33) 文献 16) の pp. 1~108.
- 34) 岡西為人, “続中国医学書目”, 文海出版社, 台北, 1971, p. 22.
- 35) 文献 10) の p. 42.
- 36) a) 大塚敬節, 漢方と漢薬, 3(12), 1(1936); b) 大塚敬節, 漢方と漢薬, 6(10), 1(1939); c) 文献 10) の pp. 41~48.
- 37) 石原明, 漢方の臨床, 6(8), 3(1959).
- 38) 文献 37) の p. 7 より援引.
- 39) a) 文献 38); b) 文献 10) の pp. 47~48. より援引.
- 40) 宮下三郎, 漢方の臨床, 9(10), 17(1962).
- 41) a) 竜野一雄, 漢方の臨床, 13(1), 26(1966); b) “康治本傷寒論”, 民族医学研究所, 東京, 1965, 序, 一丁.

- 42) a)長沢元夫, 和漢薬, No. 171, 1(1967);
b)長沢元夫, 漢方の臨床, 13(2), 3(1966);
c)長沢元夫, 東洋医学, 自然社, 18, 7(1978).
- 43) 文献 42 a)および 42 c)から援引.
- 44) 大塚敬節, 漢方の臨床, 13(10), 57(1966).
- 45) たとえば内藤希哲など. 内藤希哲, “医経解惑論”, 出雲寺文治郎ら, 京都, 1774, 近畿針灸漢方会復刻.
- 46) 吉益東洞, “薬徴”, 京都書林, 出雲寺文治郎ら, 京都, 1785.
- 47) 吉益東洞, “類聚方”, 平安書肆, 京都, 1764.
- 48) 吉益東洞, “方極”, 皇漢医学叢書, 第12冊, 大新書局, 台北, 1975.
- 49) “明刊影印金匱要略”, 第2版, 燎原, 東京, 1973, pp. 1~2.
- 50) 文献 49) の pp. 1~240.
- 51) 「名医(上工)たるものは全身状態を把握し, 病状が発現しないうちに治療すべきである」という意. 東洋医学の本質を表現した語として有名である. 靈枢, 逆順篇に「故曰上工治未病」とある. したがって, 当時現存した著名な医書中の成語であろう.
- 52) 宋代(1174年)に陳無执の著した医書. 一般に三因方と简称される.
- 53) 岡西為人, 漢方, 2(10), 30(1953).
- 54) “金匱要略”, 仲景全書, 第五冊, 寺町弥兵衛ら, 1659.
- 55) “金匱要略”, 医統正脈全書, 第5冊, 新文豊出版公司, 台北, 1975.
- 56) 近畿大学東洋医学研究所診療部門での頻用方剤はすでにまとめたが, その詳細は第12回和漢薬シンポジウム記録に収載する予定である. 久保道徳・谿忠人・森山健三・有地滋・石田定広・堀中克子, 薬局, 29(5), 57(1978) の第1表より算出した.
- 57) 異本とは宋板傷寒論に対する成本傷寒論や金匱玉函経のようなもの. 文献とはそれらの発刊以前に原本が引用されている外台秘要や千金翼方などの書である. また素問靈枢に対しては太素や甲乙経などがこれにあたる.

神農本草經の収載薬品の品別について

浜 田 善 利*

On Assortment of the Drugs contained in "Shen-nong-ben-cao-jing"

Toshiyuki HAMADA*

神農本草經は、現在数種の刊本があり、それらの内容については、それぞれ異なるところがある。そこで5種の刊本によって収載品目の対校表¹⁾をつくってみたが、その内容、特に薬品の上、中、下品の品別と配列についての差異が大きかったことがわかったので、今回は品別について検討してみた。引用した刊本は次のとおりで、対校表のものと同じである。

- A 1 清顧観光重輯 神農本草經 全1冊
人民衛生出版社 1958年5月第1版第5次印刷
- A 2 明錢塘不遠盧復手録 神農本經 全1冊
浪華書林 寛保3年(1743年) 再版、復刻本
- B 1 魏呉普等述 清孫星衍等輯 神農本草經 全1冊 台湾中華書局 民国59年(1970年) 1月 12版
- B 2 魏呉普等述 清孫星衍孫馮翼輯 神農本草經 全1冊 商務印書館 1955年7月重印
- C 1 森立之編 神農本草經 全3冊 盛文堂 昭和46年(1971年) 復刻本
- D 1 明李時珍著 本草綱目 校点本第1, 2冊(3以下未刊) 人民衛生出版社 第

- 1冊1975年12月第1版第1次印刷 第2冊1977年3月第1版第1次印刷
- D 2 明李時珍撰 本草綱目 全6冊 商務印書館 1967年3月 2版

ここでは、対校表の場合と同じく、Aを底本として考えることにする。従って各薬品に付した番号は、Aの配列順の番号である。

1. 鉱物性薬品について

Aでは次のようになっている。

上品：1 丹砂，2 雲母，3 玉泉，4 石鍾乳，5 礬石，6 消石，7 朴消，8 滑石，9 空青，10 曾青，11 禹余糧，12 太一余糧，13 白石英，14 紫石英，15 五色石脂

中品：121 雄黄，122 雌黄，123 石硫黄，124 水銀，125 石膏，126 磁石，127 凝水石，128 陽起石，129 理石，130 長石，131 石胆，132 白青，133 扁青，134 膚青

下品：241 孔公孽，242 殷孽，243 鉄精，244 鉄落，245 鉄，246 鉛丹，247 粉錫，248 錫鏡鼻，249 代赭石，250 戎塩，251 大塩，252 鹵鹹，253 青琅干，254 礬石，255 石灰，256 白堊，257 冬灰

これらの薬品を、名医別録²⁾，本草経集注³⁾，

* 熊本大学薬学部生薬学教室

Department of Pharmacognosy, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kumamoto University.
Location: Ōehon-machi, Kumamoto city.

1) 浜田善利，薬史学雑誌，12(2)，62-69(1977)。

2) 那琦，謝文全重輯，“重輯名医別録”，中国医薬学院中国薬学研究所，民国66年(1977)。

3) 齊陶弘景校注，小嶋尚真，森立之ら重輯，岡西為人訂補ならびに解題，“本草経集注”，南大阪印刷センター，昭和47年(1972)。

新修本草⁴⁾、大観本草⁵⁾、政和本草⁶⁾、本草綱目⁷⁾の各項に記載してある出典、本経の上、中、下品の別とくらべてみると、A, B, C とともに全く同じになっているものは除き、表 I のように差がある。

表 I において、本草綱目においてのみ差異がみられるものの中、校点本 (D1) 他で修正されて、品別が一応問題がないと思われる 13 白石英, 255 石灰の 2 品目、及び、本草綱目に品別の記載のない 3 玉泉, 134 膚青の 2 品目の計 4 品目を除くと、4 石鍾乳, 124 水銀, 131 石胆, 132 白青, 133 扁青, 241

孔公孽, 242 股孽, 244 鉄落の 8 品目が A の品別と異なっている。このこりの 243 鉄精と 245 鉄は、B, C とともに 244 鉄落に併合され、また、251 大塩も同じく 250 戎塩に併合されている。

B では、上品については、A 中品より 131 石胆, 132 白青, 133 膚青の 3 品目が上品に入っている。この結果、A 上品より 3 品目増加して計 18 品目である。

中品については、A 下品より、241 孔公孽, 242 股孽, 243+244 鉄精落の 3 品目が入っている。さらに 3 品目が上品に移ったので、

表 I 鉱物性薬品の異同

薬品名	A	B	C	名医別録	本草経集注	新修本草	大観本草	政和本草	本草綱目
3 玉 泉	上	上	上	上	上	上	上	上	? ⁸⁾
4 石 鍾 乳	上	上	中	中	中	上	上	上	上
13 白 石 英	上	上	上	上	上	上	上	上	下 ⁹⁾
124 水 銀	中	中	上	上	上	中	中	中	中
131 石 胆	中	上	上	上	上	上	上	上	上
132 白 青	中	上	上	上	上	上	上	上	上
133 扁 青	中	上	上	上	上	上	上	上	上
134 膚 青	中	中	中	中	中	中	中	中	? ¹⁰⁾
241 孔 公 孽	下	中	中	中	中	中	中	中	中
242 股 孽	下	中	中	中	中	中	中	中	中
243 鉄 精	下			中	中	中	中	中	中
244 鉄 落	下	中	中	中	中	中	中	中	中
245 鉄	下			中	中	中	中	中	下 ¹¹⁾
251 大 塩	下			下	下	下	下	下	? ¹²⁾
255 石 灰	下	下	下	下	下	下	下	下	中 ¹³⁾

4) 岡西為人, “重輯新修本草”, 学術図書刊行会, 昭和53年(1978).
5) 宋唐慎微撰, 芟戾校定, 木村康一, 吉崎正雄編集, “経史證類大観本草”, 広川書店, 昭和45年(1970).
6) 宋唐慎微原著, 金張存惠重刊, 那琦解題並序, 魏徳文索引刊行, “重修政和経史證類備用本草”, 南天書局, 民国65年(1976).
7) D1 の校点本は、第 3 冊以下が未刊であるから、ここでは D2 を用いて、本草綱目第21巻までを校点本により訂正した。
8) 本草綱目では、巻 8, 金石部, 石之 2, 玉類14種中の、玉の項目中に記載されているので、品別は不明である。
9) 校点本 (D1) その他では上品となっているので、これは D2 の誤植であろう。
10) 本草綱目では、巻 9, 金石部, 石之 4, 石類下40種中の白青の付録に緑膚青がある。この条に別録曰として味辛平以下14字がある。校点本 (D1) では、緑の字は、大観本草, 政和本草及び千金翼方に膚青とあって、緑の字はないと註記し、さらに味辛平以下の14字についても、大観本草, 政和本草などで白字としているから、本経の文であると註記している。なお、重輯名医別録でも、膚青は朱書されている。
11) D2 では下品であるが、校点本 (D1) では、政和本草と千金翼方により、中品に改めている。
12) 本草綱目では、巻11, 金石部, 石之 5, 鹵石類20種中の、食塩の項目中に記載されているので、品別は不明である。
13) D2 では中品であるが、校点本 (D1) では大観本草, 政和本草及び千金翼方により下品に改めている。

品数はA中品と同じ14品目である。

下品については、A下品に新たに追加されたものではなく、A下品で243 鉄精、244 鉄落、245 鉄の3品目が鉄精落1品目となり、248 錫鏡鼻が247 粉錫に併合され、251 大塩、252 鹵鹹が250 戎塩に併合されて、数の上で計5品目が減少している。さらに3品目が中品に移ったので、A下品より8品目減少して計7品目である。

Cでは、上品については、A中品より124 水銀、131 石胆、132 白青、133 扁青の4品目が入り、A上品の4石鍾乳が中品に移っている。その結果、A上品より3品目増加して計18品目である。

中品については、A上品より4石鍾乳、A下品より241 孔公莖、242 殷莖、244 鉄落の計4品目が入っている。さらにA中品の4品目が上品に移ったので、結局A中品と同じ14品目である。

下品については、A下品より中品へ3品目移り、さらにBの場合と同様に併合によって5品目減少している。故にA下品より8品目減少して計9品目である。

これらの移動を、名医別録から本草綱目までの品別によって整理すると、次のようになる。

1 名医別録、本草経集注、新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目のすべてが同一の品別である。この場合、その品別はAとは異なり、B、Cと同じである。

1—1 Aは中品、B、Cはともに上品

131 石胆、132 白青、133 扁青の3品目

1—2 Aは下品、B、Cはともに中品

241 孔公莖、242 殷莖、244 鉄落の3品目

2 名医別録と本草経集注が同一、新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目が同一で、この両者が異なる品別である。この場合、Bは新修本草、大観本草、政和本草、本草綱目と同じであり、Cは名医別録、本草経集注と同じである。

2—1 Aは上品、Bは上品、Cは中品

4石鍾乳の1品目

2—2 Aは中品、Bは中品、Cは上品

124 水銀の1品目

2. 植物性薬品について

植物性薬品は、Aに252品目、Bに249品目、Cに252品目がある。これらの薬品を、名医別録、本草経集注、新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目の各項目に記載してある出典、本経の上、中、下品の別とくらべてみると、A、B、Cとともに全く同じになっているものは除き、表Ⅱのように差がある。

表Ⅱにおいて、本草綱目においてのみ差異がみられるものの中、校点本(D1)で修正されていると思われる、36 龍胆、81 王不留行、104 胡麻、167 葶藶、212 葱実、312 蜀椒、313 阜茨の7品目、及び本草綱目に品別の記載のない329 薬実根の1品目、計8品目を除いて検討する。

Bでは、上品については、A中品より140 柴胡、141 芍药、160 茜根、168 白兔藿、169 营实、171 薇衔、190 藁木、203 木蘭、204 五加皮の9品目、及びA下品より289 姑活、290 別翳、310 屈草、329 淮木、332 瓜蒂の5品目が入っている。またAでは104 胡麻の条にある青裏が独立して1品目となり、さらに升麻が入って、計16品目が増加している。一方Aの46赤芝—51紫芝が赤黒青白黄紫芝として1品目となり、数の上では5品目減少している。その結果、A上品より11品目増加して計105品目である。

中品については、A下品より、325 松蘿、330 大豆黄卷の2品目が入り、新たに粟米、黍米の2品目が加わって、計4品目が増加している。一方A中品より上品へ9品目、下品へ4品目移り、さらに212 葱実と213 薤が合併して葱実薤となり1品目減、故に計14品目の減少である。その結果、A中品より10品目減少して計72品目である。

下品については、A中品より、207 彼子、209 桃核仁、210 杏核仁、216 水芹が入って4品目増加している。一方A下品より上品へ

表Ⅱ 植物性薬品の異同

	薬品名	A	B	C	名医別録	本草経集注	新修本草	大観本草	政和本草	本草綱目
36	龍胆	上	上	上	上	上	上	上	上	中 ¹⁴⁾
39	巴戟天	上	上	下	下	下	上	上	上	上
54	蘿蘂	上	上	中	中	中	上	上	上	上
55	黃連	上	上	中	上	中	上	上	上	上
58	黃耆	上	上	中	中	中	上	上	上	上
60	防風	上	上	中	中	中	上	上	上	上
63	統斷	上	上	中	中	中	上	上	上	上
66	決明子	上	上	中	中	中	上	上	上	上
67	丹参	上	上	中	中	中	上	上	上	上
68	飛廉	上	上	下	下	下	上	上	上	上
69	五味子	上	上	中	中	中	上	上	上	上
76	杜若	上	上	中	中	中	上	上	上	上
77	沙参	上	上	中	中	中	上	上	上	上
81	王不留行	上	上	上	上	上	上	上	上	別録 ¹⁵⁾ 上
104	胡麻	上	上	上	上	上	上	上	上	別録 ¹⁶⁾ 上
140	柴胡	中	上	上	上	上	上	上	上	上
141	芎藭	中	上	中	中	中	上	上	上	上
154	淫羊藿	中	中	下	下	下	中	中	中	中
156	石龍芮	中	中	上	上	上	中	中	中	中
160	茜根	中	上	上	上	上	上	上	上	上
164	紫参	中	中	下	下	下	中	中	中	中
167	草薢	中	中	中	中	中	中	中	中	別録 ¹⁸⁾ 中
168	白兔藿	中	上	上	上	上	上	上	上	上
169	營実	中	上	上	上	上	上	上	上	上
171	薇銜	中	上	中	中	中	上	上	上	上
172	翹根	中	中	下	中	下	?	?	?	?
175	地榆	中	中	下	下	下	中	中	中	中
177	沢蘭	中	中	下	下	下	中	中	中	中
178	防己	中	中	下	下	下	中	中	中	中
179	牡丹	中	中	下	下	下	中	中	中	中
180	款冬花	中	中	下	下	下	中	中	中	中
184	女菀	中	中	下	下	下	中	中	中	中
190	藥木	中	上	中	中	中	上	上	上	中 ¹⁹⁾
198	秦椒	中	中	上	上	上	中	中	中	中
203	木蘭	中	上	上	上	上	上	上	上	上
204	五加皮	中	上	下	下	下	上	上	上	上

14) D2 では中品であるが、校点本 (D1) では大観本草、政和本草及び千金翼方により上品に改めている。

15) D2 では別録となっているが、校点本 (D1) では大観本草と政和本草及び本草綱目巻2の本経目録中に王不留行があることから、本経と改めている。

16) D2 では別録となっているが、国訳本草綱目¹⁷⁾の底本では本経となっている。校点本 (D1) は未刊であるが、本経とされるであろう。

17) “新註校定国訳本草綱目”，第1-12冊，春陽堂，昭和48-52年(1973-1977)。

18) D2 では別録となっているが、校点本 (D1) では大観本草と政和本草及び本草綱目巻2の本経目録で中品であることから、本経と改められている。

19) D2 では中品であるが、国訳本草綱目の底本では上品となっている。校点本 (D1) は未刊であるが、上品とされるであろう。

薬品名	A	B	C	名医別録	本草経集注	新修本草	大観本草	政和本草	本草綱目
207 彼子	中	下	下	下 ²⁰⁾	下 ²¹⁾	下 ²²⁾	? ²³⁾	? ²⁴⁾	? ²⁵⁾
209 桃核仁	中	下	下	下	下	下	下	下	下
210 杏核仁	中	下	下	下	下 ²⁶⁾	下	下	下	下
212 葱実	中	中	中	中	中	中	中	中	別録 ²⁷⁾ 中
213 薤	中			中	中	中	中	中	別録 ²⁸⁾ 中
216 水芹	中	下	下	下	下	下	下	下	下
266 桔梗	下	下	中	中	中	下	下	下	下
289 姑活	下	上	下	下	下	?	?	?	別録 ²⁹⁾
290 別羈	下	上	下	下	下	?	?	?	?
300 石下長卿	下		下	下	下	?	?	?	? ³⁰⁾
310 屈草	下	上	下	下	下	?	?	?	?
312 蜀椒	下	下	下	下	下	下	下	下	中 ³¹⁾
313 阜莢	下	下	下	下	下	下	下	下	中 ³²⁾
325 松蘿	下	中	中	中	中	中	中	中	下 ³³⁾
326 薬実根	下	下	下	下	下	下	下	下	? ³⁴⁾
329 淮木	下	上	下	下	下	?	?	?	下
330 大豆黄卷	下	中	中	中	中	中	中	中	中
332 瓜蒂	下	上	上	上	上	上	上	上	上

20) 名医別録巻3 虫獣果菜米部有名無用 364 種中の虫獣部下品にある。

21) 本草経集注巻6 虫獣にある。

22) 新修本草虫魚部巻第16にある。

23) 大観本草巻30有名未用中の今新退1種にあり、品別は不明である。

24) 政和本草巻30有名未用中の今新退1種にあり、品別は不明である。

25) 本草綱目巻31果部の樞実とする。故に神農本草経としての品別は不明である。

26) 本草経集注では墨書してある。

27) D2 では別録となっており、国訳本草綱目の底本も別録となっていて、考定者は何も註記していない。しかし重輯名医別録には葱実のみがあつて朱書されている。また本草綱目の本文中で、それぞれ葱実、葱茎白の主治の最初の文は本経に由来する。校点本 (D1) は未刊であるが、本経とされるであろう。

28) D2 では別録となっており、国訳本草綱目の底本も別録となっていて、考定者は何も註記していない。しかし重輯名医別録には薤は朱書されている。また本草綱目の本文中で、薤白の主治の文は本経に由来する。校点本 (D1) は未刊であるが、本経とされるであろう。

29) 名医別録から政和本草までは本経収載品とされるが、D2 では巻21, 草之11, 有名未用中であつて別録収載品となっている。しかし校点本 (D1) では姑活味甘温……一名冬葵子まで、無毒の2字を除いて27字が大観本草と政和本草で白字となっているから、本経の文であると註記されている。

30) 石下長卿は D2 では本草綱目、巻13, 草之2, 山草類下40種中にある徐長卿に併合されているので、品別は不明である。李時珍は呉氏本草により徐長卿に編入している。しかし校点本 (D1) では徐長卿の釈名にある李時珍の解説中の「名医別録干有名未用」の9字は、大観本草と政和本草では石下長卿の条が白字であり、また本草綱目巻2の本経目録下品中に石下長卿があることにより、「本経」の2字に改められている。

31) D2 では中品であるが、国訳本草綱目では、考定者により、金陵本、江西本及び證類本草に本経下品に作ると註記されている。校点本 (D1) は未刊であるが、下品とされるであろう。

32) D2 では本経中品であるが、国訳本草綱目では、新註の考定者により、證類本草では木部下品とすると註記されている。この木部は本経の誤と思われる。校点本 (D1) は未刊であるが、本経下品とされるであろう。

33) D2 では下品であるが、国訳本草綱目の底本では中品となっている。校点本 (D1) は未刊であるが、中品とされるであろう。

34) 本草綱目では、巻18, 草之7, 蔓草類73種中の解毒子の付録に記載されて、品別は下明である。

5品目、中品へ2品目移り、さらに300石下長卿がなくて計8品目が減少している。故にA下品より4品目減少して計72品目である。

Cでは、上品については、A中品より140柴胡、156石龍芮、160茜根、168白朮、169営実、197秦椒、203木蘭の7品目が入り、A下品より、332瓜蒂の1品目が入っている。またAでは104胡麻の条にある青蘘が独立して1品目となり、さらに升麻が入って、計10品目が増加している。一方、中品へ10品目、下品へ2品目移って計12品目が減少している。故にA上品より2品目減少して計92品目である。

中品については、A上品より54蘼蕪、55黄連、58黄耆、60防風、63統断、66決明、67丹参、69五味、76杜若、77沙参の10品目が入り、A下品より、266桔梗、325松蘿、330大豆黄卷の3品目が入って、計13品目が増加している。一方A中品より、上品へ7品目、下品へ14品目移り、さらに212葱実と213薤が合併して葱実薤となって1品目減少、計22品目減少している。その結果、A中品より9品目減少して計73品目である。

下品については、A上品より、39巴戟天、68飛廉の2品目、A中品より、154淫羊藿、164紫参、172翹根、175地榆、177沢蘭、178防己、179牡丹、180欵冬、184女苑、204五加、207彼子、209桃核、210杏核、216水芹の14品目が入って、計16品目が増加している。一方、A下品より上品へ1品目、中品へ3品目移り、さらに324鼠李が252郁核に併合されて1品目減少して、計5品目が減少している。故にA下品より11品目が増加し、計89品目である。

これらの移動を、名医別録から本草綱目までの品別によって整理すると、次のようになる。

- 1 名医別録、本草経集注、新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目のすべてが同一の品別である。この場合、その品別はAとは異なり、B、Cと同じである。

1—1 Aは中品、B、Cはともに上品

140柴胡、160茜根、168白朮、

169営実、203木蘭の5品目

1—2 Aは中品、B、Cはともに下品

207彼子、209桃核仁、210杏核仁、
216水芹の4品目

1—3 Aは下品、B、Cはともに上品

332瓜蒂の1品目

- 2 名医別録と本草経集注が同一、新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目が同一で、この両者が異なる品別である。この場合、Bは新修本草、大観本草、政和本草、本草綱目と同じであり、Cは名医別録、本草経集注と同じである。

2—1 Aは上品、Bは上品、Cは中品

54蘼蕪、58黄耆、60防風、63統断、
66決明子、67丹参、69五味子、76
杜若、77沙参の9品目

2—2 Aは上品、Bは上品、Cは下品

39巴戟天、68飛廉の2品目

2—3 Aは中品、Bは上品、Cは中品

141芎藭、171微衡、190薬木の3品目

2—4 Aは中品、Bは上品、Cは下品

204五加皮の1品目

2—5 Aは中品、Bは中品、Cは上品

156石龍芮、197秦椒の2品目

2—6 Aは中品、Bは中品、Cは下品

154淫羊藿、164紫参、175地榆、
177沢蘭、178防己、179牡丹、
181欵冬花の7品目

2—7 Aは下品、Bは下品、Cは中品

266桔梗の1品目

- 3 本草経集注だけが違って、他はすべてA、Bと同じ品別である。この場合、本草経集注はCと同じである。

3—1 A、Bはともに上品、Cは中品

55黄連の1品目

3—2 A、Bはともに中品、Cは下品

184女苑の1品目

- 4 新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目で、品別が不明のものがある。

4—1 Aは中品、Bは中品、Cは下品

172翹根の1品目

4—2 Aは下品、Bは上品、Cは下品

289 姑活, 290 別羈, 310 屈草,
329 淮木³⁵⁾の4品目

4—3 Aは下品, Bは欠, Cは下品
300 石下長卿の1品目

3. 動物性薬品について

Aでは次のようになっている。

上品: 110 龍骨, 111 麝香, 112 熊胆, 113 白膠, 114 阿膠, 115 石蜜, 116 蜂子, 117 蜜蠟, 118 牡蠣, 119 龜甲, 120 桑螵蛸

中品: 217 髮鬘, 218 白馬茎, 219 鹿茸, 220 牛角觶, 221 羖羊角, 222 牡狗陰茎, 223 羚羊角, 224 犀角, 225 牛黃, 226 豚卵, 227 麋脂, 228 丹雄鷄, 229 雁肪, 230 鼈甲, 231 鮫魚甲, 232 蠶魚, 233 鯉魚胆, 234 烏賊魚骨, 235 海蛤, 236 文蛤, 237 石龍子, 238 露蜂房, 239 蛭蟬, 240 白僵蚕

下品: 334 六畜毛蹄甲, 335 燕屎, 336 天鼠屎, 337 鼯鼠, 338 伏翼, 339 蝦蟇, 340 馬刀, 341 蟹, 342 蛇蛻, 343 蛻皮, 344 蠟蟬, 345 蜚蝗, 346 蛭蝨, 347 白頸蚯蚓, 348 蟾蜍, 349 石蚕, 350 雀甕, 351 楞鷄, 352 斑猫, 353 螻蛄, 354 蜈蚣, 355 馬陸, 356 地胆, 357 螢火, 358 衣魚, 359 鼠婦, 360 水蛭, 361 木虻, 362 蜚虻, 363 蜚蠊, 364 麤虫, 365 貝子

これらの薬品を、名医別録、本草經集注、新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目の各項目に記載してある出典、本經の上、中、下品の別とくらべてみると、A、B、C とともに全く同じになっているものは除き、表Ⅲのように差がある。

表Ⅲにおいて各薬品の移動を検討すると、次のようになる。

Bでは、上品については、A中品より 217 髮鬘, 225 牛黃, 228 丹雄鷄, 229 雁肪, 232 蠶魚, 233 鯉魚胆, 235 海蛤, 236 文蛤の8品目が入り、その結果、A上品より8品目増加して計19品目である。

中品については、A下品より、335 燕屎, 336 天鼠屎, 338 伏翼, 341 蟹, 343 蛻皮,

346 蛭蝨, 348 蟾蜍, 351 楞鷄, 361 木虻, 362 蜚虻, 363 蜚蠊, 364 麤虫の12品目が入っている。またA中品より8品目が上品へ、2品目が下品に移って計10品目が減少している。故にA中品より2品目増加して計26品目である。

下品については、A中品より、226 豚卵, 227 麋脂の2品目が入って増加し、また12品目が中品に移って減少している。故にA下品より10品目減少して計22品目である。

Cでは、上品については、A中品より 217 髮鬘, 225 牛黃, 228 丹雄鷄, 229 雁肪, 232 蠶魚, 233 鯉魚胆の6品目が入って増加し、119 龜甲, 120 桑螵蛸の2品目が中品に移って減少している。故にA上品より4品目増加して計15品目である。

中品については、A上品より、119 龜甲, 120 桑螵蛸の2品目、下品より、338 伏翼, 341 蟹, 343 蛻皮, 346 蛭蝨, 348 蟾蜍, 351 楞鷄, 360 水蛭, 361 木虻, 362 蜚虻, 363 蜚蠊, 364 麤虫の11品目が入って、計13品目が増加している。また、上品へ6品目、下品へ2品目移り、さらに220 牛角觶が225 牛黃に、236 文蛤が235 海蛤に併合されて2品目減少、計10品目が減少している。故にA中品より3品目増加して計27品目である。

下品については、A中品より、226 豚卵, 227 麋脂の2品目が入っている。また中品へ11品目移り、さらに337 鼯鼠が330 六畜毛蹄甲に併合されて、計12品目が減少している。故にA下品より10品目減少して計22品目である。

これらの移動を、名医別録から本草綱目までの品別によって整理すると、次のようになる。

1 名医別録、本草經集注、新修本草、大観本草、政和本草及び本草綱目のすべてが同一の品別である。この場合、その品別はAとは異なり、B、Cと同じである。

1—1 Aは中品, B、C はともに上品
225 牛黃, 228 丹雄鷄, 229 雁肪,

35) 本草綱目では下品である。

表Ⅲ 動物性薬品の異同

	薬品名	A	B	C	名医別録	本草経集注	新修本草	大観本草	政和本草	本草綱目
119	龜甲	上	上	中	中	中	上	上	上	上
120	桑螵蛸	上	上	中	中	中	上	上	上	上
217	髮髮	中	上	上	上	上	上	?	?	?
225	牛黄	中	上	上	上	上	上	上	上	上
226	豚卵	中	下	下	下	下	下	下	下	下
227	麋脂	中	下	下	下	下	下	下	下	下
228	丹雄鶏	中	上	上	上	上	上	上	上	上
229	雁肪	中	上	上	上	上	上	上	上	上
232	蠶魚	中	上	上	上	上	上	上	上	上
233	鯉魚胆	中	上	上	上	上	上	上	上	上
235	海蛤	中	上	中	中	中	上	上	上	上
236	文蛤	中	上		中	中	上	上	上	上
335	燕屎	下	中	下	下	下	下	中	中	別録 ³⁶⁾ 中
336	天鼠屎	下	中	下	下	下	中	中	中	?
338	伏翼	下	中	中	中	中	中	中	中	上 ³⁷⁾
341	蟹	下	中	中	中	中	中	中	中	中
343	蛭皮	下	中	中	中	中	中	中	中	中
346	蛞蝓	下	中	中	中	中	中	中	中	中
348	蟻螯	下	中	中	中	中	中	中	中	中
351	楞鶏	下	中	中	中	中	中	中	中	中
360	水蛭	下	下	中	中	中	中	下	下	別録 ³⁸⁾ 下
361	木虻	下	中	中	中	中	中	中	中	中
362	蜚虻	下	中	中	中	中	中	中	中	中
363	蜚蠊	下	中	中	中	中	中	中	中	中
364	塵虫	下	中	中	中	中	中	中	中	中

232 蠶魚, 233 鯉魚胆の5品目

なお, 217 髮髮はここに相当するが, 大観本草, 政和本草, 本草綱目における品別は不明である。

1—2 Aは中品, B, C はともに下品

226 豚卵, 227 麋脂の2品目

1—3 Aは下品, B, C はともに中品

338 伏翼, 341 蟹, 343 蛭皮, 346 蛞蝓, 348 蟻螯, 351 楞鶏, 361 木虻, 362 蜚虻, 363 蜚蠊, 364 塵虫の10品目

2 名医別録と本草経集注が同一, 新修本草, 大観本草, 政和本草及び本草綱目が同一で, この両者が異なる品別である。この場合, Bは新修本草, 大観本草, 政和本草, 本草綱目と同じであり, Cは名医別録, 本草経集注と同じである。

2—1 Aは上品, Bは上品, Cは中品

119 龜甲, 120 桑螵蛸の2品目

2—2 Aは中品, Bは上品, Cは中品

235 海蛤の1品目

なお 236 文蛤もここに入るがCは欠

36) D2 では別録であるが, 国訳本草綱目では考定者により, 燕屎の主治の条に本経の2字を入れるよう註記されている。校点本(D1)は未刊であるが, 本経とされるであろう。

37) D2 では本経中品であるが, 国訳本草綱目では考定者により, 本経に下に作り, 大観本草で中に作ると註記されている。校点本(D1)は未刊であるが, 本経中品とされるのではないと思われる。

38) D2 では別録であるが, 国訳本草綱目の底本では本経となっている。校点本(D1)は未刊であるが, 本経とされるであろう。

2—3 Aは下品, Bは中品, Cは下品

335 燕屎, 336 天鼠屎の2品目

2—4 Aは下品, B³⁹⁾は下品, Cは中品

360 水蛭の1品目

4. 被子について

207 被子は, 名医別録と本草経集注では虫獸部, 新修本草では虫魚部とされるが, 本草綱目では巻31果部で榧実(別録下品)の項に記載されている。これは李時珍が蘇恭の説によって榧実と併合したと註記しているものである。名医別録では巻3虫獸部下品42種の中で, 雀龜と鼠婦の間にある。本草経集注では巻6虫獸部の雀龜と鼠婦の間にあり, 「不知其形何類也」とある。新修本草では巻16虫魚部で, 雀龜と鼠婦の間にあり, 「謹按此彼字当木傍作皮傍仍音彼木实也誤入虫部(中略)此条宜在果部中也」と付記している。大観本草では巻30有名未用の末で今新退1種として収載し, 「陶隱居不識唐本注以為榧实今抛木部下品自有榧实一条而被子又在虫魚部中雖同出永昌而主療稍別古今未弁兩注不明今移入於此卷末以俟識者」と付記されている。

本草綱目で李時珍は「榧实被子治療相同当為一物無疑但本經被子有毒似有不同亦因其能殺虫蠱爾注穎以粗榧為被子終是一類不甚相違也」と説明している。これより考えると, 被子は動物性薬品より植物性薬品の方に移した方が適当であろう。

5. 升麻, 粟米, 黍米について

升麻はBとCにおいて, ともに上品に収載されている。名医別録及び本草経集注においては, 草木部下品にあり, 新修本草, 大観本草, 政和本草においては草部上品にある。そしてこれらはすべて墨字で書かれており, 朱字または白ぬき字ではない。つまり本經にあるという指示はない。D2においては本經上品とあるが, 校点本(D1)で, 大観本草, 政

和本草で升麻は黒字であり, 別録の文となっていること, 及び, 本草綱目巻2所載の本經目録中になくことから, 升麻は別録の上品であると修正されている。故に名医別録より本草綱目までの文献には本經の記載はないが, 森鹿三⁴⁰⁾及び岡西為人⁴¹⁾はともに, 太平御覽に基づいて, BとCにとり入れられたと考証している。そして久保道徳ら⁴²⁾は, 升麻は名医別録以前の文献に収載されたものであると結論している。

粟米はBにおいてのみ上品に収載されている。名医別録より本草綱目に至るまで, 米部あるいは米穀部の中品であり, これらには升麻と同様に本經の指示はない。

黍米もBにおいてのみ上品に収載されている。黍米は名医別録, 本草経集注及び新修本草においては米部の下品とされ, 大観本草, 政和本草及び本草綱目では米穀部の中品とされる。黍米もまた, 前二者と同様に, 本經の指示はない。

粟米と黍米はともに, 森鹿三及び岡西為人により, 太平御覽にひく呉氏本草により, Bにとり入れられたと考証している。

6. 考 察

森鹿三及び岡西為人の考証によれば, Aは甚だ粗としてしりぞけられている。それはひとつには, 李時珍の本草綱目が, それまでの本草書の形式を改め, 全くの独自の構成によったために, 歴代の本草書を毀損しているとの説に基づく。その結果として, 本草綱目に収載された本經目録はとるにたらぬとする。それは実際に検討してみると, 李時珍の本經目録に準拠したとみられるAにおいては, ここにみたように, 名医別録より本草綱目まで一貫して同じ品別であるのに対して, それと異なるように品別されているものがある。それは, 鉱物においては171石胆以下6品目, 植物においては140柴胡以下10品目, 動物

39) 新修本草では中品である。

40) 森鹿三, 京都大学人文科学研究所創立25周年記念論文集, 658-673(1944)。

41) 岡西為人, 漢方の臨牀, 6(9), 495-506, 6(10), 568-576(1959)。

42) 久保道徳, 木村善行, 難波恒雄, 薬史学雑誌, 10(1,2), 34(1975)。

においては 225 牛黄以下 17 品目もあることも、軽視される理由のひとつとされよう。しかしまた、B または C を主にしようとするれば、各品の品数が序例にある数と合致しない矛盾がある。このような品別の適不適については、各薬品の内容に関する詳細な検討が必要であろう。

李時珍は、彼子を果部に移したように、何か根拠があつての上で、巻 1 に神農本草経名例を入れたと思われる。現在中国で刊行中の校点本 (D1) では、この本草経名例も資料として引用している。このような事情を考えると、今 A を一挙に否定する根拠もなさそうである。

Summary

There are some differences among the contents of the books “Shen-nong-ben-caojing” 神農本草経 published differently in China and Japan. According to the previous report, a comparative list of these drugs, the differences on assortment and on arrangement can be easily seen.

Generally in “Shen-nong-ben-caojing” 神

農本草経 the drugs are assorted in three classes, ie. upper class 上品, middle class 中品 and low class 下品. There are 120 drugs each in upper and middle classes, and 125 in low class respectively. That makes 365 drugs in all. But two kinds of the books cited as B (reconstructed by Sun-xing-yan et al 孫星衍等) and C (by Tatsuyuki Mori 森立之) do not have such amount of the drugs. I consulted on “Ming-yi-bie-lu” 名医別録, “Ben-caojing-jizhu” 本草経集注, “Xin-xiu-ben-caojing” 新修本草, “Da-guan-ben-caojing” 大觀本草, “Zheng-he-ben-caojing” 政和本草 and “Ben-caojing-gang-mu” 本草綱目, and showed here in Table I, II and III how different the drugs in these books.

In addition to the contents of the books cited as A (reconstructed by Gu-guan-gung 顧觀光 or by Lu-fu 盧復), Sheng-ma 升麻 is included in B and C, and Su-mi 粟米 and Shu-mi 黍米 in B. However all historical literatures named above described them not to be in “Shen-nong-ben-caojing” 神農本草経.

前 号 の 訂 正

第 13 卷 1 号の「近世日本薬園史の展望」(そのⅡ)に下記の印刷上の誤りがありました。著者ならびに読者諸氏に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

頁	と	行	誤	正
p. 24	上表	6 行目	スクロフラ・ノドサ	スクロフラリア・ノドサ
p. 28	左段	下より 3 行目	Izalinin	Izalpinin
p. 28	右段	上より 20 行目	372 (1933)	372 (1932)
p. 29	右段	最後の行	村研究	村研究所

編 集 幹 事 : 長 沢 元 夫 , 川 瀬 清

昭和53年 (1978) 12月25日 印刷 昭和53年12月30日 発行
編集兼発行人 東京都千代田区神田駿河台 1—8 滝 戸 道 夫
日本大学理工学部薬学科内
日本薬史学会
印 刷 所 東京都文京区後楽 2—21—8 サンコー印刷株式会社

滋養強壯生薬製剤 人参四物湯



***** 適応症 *****

次の場合の滋養強壯：
 肉体疲労・血色不良
 冷え症・胃腸虚弱
 食欲不振・病中病後
 虚弱体質



エスエス製薬株式会社

東京都中央区日本橋浜町2-12-4